

---

# ガンダム免許教習所！！

黒月古城

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ガンダム免許教習所！！

### 【Nコード】

N1462S

### 【作者名】

黒月古城

### 【あらすじ】

諸君。小生はMSが好きだ。主人公機、量産機、ワンオフ…この地上にあるありとあらゆる大型2速歩行兵器が大好きだ。

この物語は、起動戦士ガンダムシリーズのパロディ物です。キャラ崩壊？通常技！！矛盾？日常茶飯事！！なのでどうかご容赦を。

平和なパラレルワールドに住む小生、黒月は春休みの間を使ってMS免許取得に乗り出します。通っている教習所がなんともクセのあ

る面白い教習所です。そんな教習所での日常をここに記させてもらいます。

## 今日から楽しい(?) 教習所(前書き)

本気でガンダム好きな人は逃げてください!!! ココは小生が引き受  
けます!!! だから今のうちにッ... ぐばあああ!!! w w

## 今日から楽しい(?) 教習所

小生は黒月。安心しろ、ただのフツの一般人だ。現在高校最後の春休めで絶賛二ト中。あ、バイトしてるからフリーターかな？

そうそう、この世界はちょっとばかり歪んでな。いや、危ない意味じゃなくて。要するにパラレルって訳。だからガンダムとかいるわけだしねえ。兵器は突き詰めていくと2足歩行である理由がどんどんなくなっていくとか聞いたことあるけど、まあその辺はおいといてだ。ただいま小生はある教習所に通っている。まだ親のところに住んでるからそんなにお金は必要ない。んで、余ったお金で何するかって言うとな…

モビルスーツ免許取得!!!

……そう引くなって。一口にMS免許つつつても色々あんのよ。大型MS制御免許とか、中型特殊MS取り扱い免許とかその他エトセトラ。車好きが車の写真とか見て「ウホッ!!」するのとおんなじだ。漢<sup>おとこ</sup>つてのは自分より強いモンに憧れるものだ。小生の場合それがモビルスーツだったって訳だ。

そうそう、今通ってる教習所がすっぱー面白くてさ。まあこれから見せていくから楽しんでってよ。

某日・九時。

黒月「今日から教習所か。まあ有って困るもんでもないし。さて、迎えのバスはまだかなあ…」

小生が申し込みをした教習所は迎えのバスが来てくれるのだ。値段も良心的、指導者の腕のよさにも定評がある有名なMS教習所だ。友人がそこで働いている人にコネがあつたんで、入学はとんとん拍子に進んでいった。と、道の向こうから何か大きなものが走ってくるのが見えた。

黒月「あ、迎えかな？…マジかよ…」

目の前にゆっくり停車したのはガンダム最新作で活躍したダブルオーガンダム支援用兵器、オーライザーだった。と、搭乗口から人が降りてきた。

沙慈「やあ、君が黒月君だね。送迎オーライザーを運転する沙慈・クロスロードだよ。よろしくね」

開いた口が塞がらない。いきなり有名どころである。冒頭にパラルって言ったけど、そういうことなんで理解しておいてほしい。一応言っとくけど、この世界は何でガンダムが開発されたのか分からないほど平和だ。ということで色々誤解を招くようなことがあるかもしれないが、どうか流し目で勘弁してほしい。

黒月「あ、よろしくお願いします…」

沙慈「うん、よろしく。じゃあう後ろのキャリーコンテナに乗り込

んで」

オーライザーの後ろには人を輸送するためのキャリアコンテナが据え付けられている。小生は高鳴る心を落着けながらキャリアコンテナに乗り込んだ。

黒月「案外広いな…ん？」

？「あ、ひっさしぶり〜！！元気してた？」

黒月「テメエは……………」

黒月「誰だっけ？」

素で忘れてしまっていた。

？「そうだね、お互い初対面だし」

黒月「っておい！！思わせぶりな伏線かと思ったらそうでもねーのかよー！！」

？「あはは！！いい反応だね〜。嫌いじゃないよ、そういつツッコミ。私はレイナ。よろしくね〜」

黒月「…黒月です。あなたも今日からですか？」

レイナ「もう、レイナって呼んでよ、あなたと私の仲じゃない。あと敬語もいいからね。そうよ、今日から通うんだ」

黒月「仲も何も初対面でしょうに…同期ですか。よろしく願いますよ」

レイナ「次敬語使ったらサイコガンダムで踏み潰すわよ？」

黒月「おーけー、理解した」

こうして小生のMS免許取得物語は始まったのです…



今日から楽しい(?) 教習所(後書き)

プ  
ロ  
ロ  
ー  
グ  
っ  
て  
こ  
と  
で  
短  
め  
で  
す。  
本  
と  
に  
す  
ん  
ま  
せ  
ん  
で  
し  
た  
w  
w

## 現在登校中（前書き）

会話のテンポには定評があります。ただ中身の文章がつたないです。あれ？これって致命的じゃね？

主人公・黒月：ツツコミ担当。この物語の主人公。一応良識人。若干ツツコミがくどい

レイナ：現在ヒロイン的立場。でも変態。でもスタイル抜群。でも変態。でも容姿端麗。

なんだこいつ：増えるぞ?!（新キャラ的な意味で）

## 現在登校中

沙慈「もう一人迎えに行く予定だからもうちょっとまってね」

二人「はい」

小生とレイナはだべりながら二人には広すぎる輸送用コンテナでくつろいでいた。戦闘兵器の中とは思えない快適さだ。中央に置かれたテーブルにはたくさんのお菓子が置かれている。隅っこに自動販売機まである。ココほんとに貨物コンテナの中なのか？

レイナ「そういやもう一人乗るって言うてたよね？どんなのが来るんだろ？」

黒月「多分小生の友人じゃねえかな。この辺りの居住区に住んでるって聞いたし、そいつも今日から通うらしい」

レイナ「へえ、どんな人どんな人？」

黒月「そうだなあ…体型はゴツグ、MS、銃器、巨乳好き。三度の飯とエロが好き」

レイナ「あなたの好みの大きさは？」

黒月「そうだなあ…ってちげえ！！論点ズレ過ぎだろ？！」

レイナ「ごまかしたwwwwほつぺた赤くなってるよッンッンwwww」

黒月「オーケー、剣を抜け！！神の世界への引導を渡してやる！！」

レイナ「ヌケだなんて…私は女の子なのよ？／＼／＼／」

黒月「もうだめだこいつはやくなんとかしねえと」

気がついたらオーライザーのスピードが落ちてきている。停車場所に近づいたのだろうか。次第にスピードは落ち、停車した。

しばらくするとコンテナの搭乗口から一人の男が入ってきた。後光に照らされ、軽くスモークが流れてるなか、その男は歌っていた。

？「あゝさゝもよゝるゝもゝ、とゝいれゝで  
ズムで  
「 02 のリ

レイナ「……………」

黒月「なんつーかすまん。ほんとにゴメン」

レイナ「なんて存在感なの……？私のアイデンティティーがこんなにも容易に崩されていくなんて…只者ではないようね…」

黒月「張り合う必要はない。やめたまえ」

手を組んでキラリとメガネを輝かせる小生。どこかの司令官でこんな奴いたっけか。

？「おう黒月！！ムスコは元気か？俺のムスコは！！ぜっこー！ー

「ちょーーーーーであーーーーるううう！！」

凄まじい存在感とともに現れたはふとつてい…もとい、体格のいいメガネの男。どこかの少佐を思わせる雰囲気だ。諸君！！私はMSが好きだ！！とか言っつてそんな感じ。

黒月「女の子居るんだから自重しろよ三枚に下ろすぞ…こいつはヤモリ。残念ながら小生の友人だ。根は多分イイやつだから…多分…そう果てしなく多分…」

レイナ「私はレイナ。よろしくね、ヤモリさん？」

ヤモリ「よろしく！！そしてナ二言ってくれてんだ黒月？私は紳士という名の変態であり変態と言う名の紳士でもあるんだぞ？」

黒月「やかましいわ変態！！わざわざナ二の部分を勘違いするようにカタカナにしゃがって！！お望みなら汚ねえ花火にしてやろうか？！」

ヤモリ「一つ教えておいてやろう黒月…」

その途端ヤモリの身体から尋常ではないオーラが放出され始める。

黒月「くっ…まさかやつめ、この春休みという短期間の間で覚醒したというのか？！EROSUの境地に至ったというのか？！」

ヤモリ「変態という言葉は私の耳に届いた瞬間にイケメンという言葉葉に変換される…これすなわち！！変態紳士・脳内変換フィルター！！」  
「ババーン！！」

一瞬スーパーヒーローが登場したときの虹色の爆発が起こったような気がした。

黒月「ダメだ…いろんな意味で勝ちたくない…」

レイナ「あはははははは！！凄い！！世の中にはこんな凄い人が存在していたなんて。弟子にしてください！！！」

ヤモリ「よかろう！！あの夕日に向かってダッシュだ！！」

レイナ「iiiiiiiしょおおお！！」

ヤモリ「レEEEEEEEEイナアアアア！！」

黒月「もうだめだこいつらもうどうしようもねえだれかなんとかしてください！！ツツコミが足りねえええええ！！」

今から頭痛がしてきました。バックにわざわざ夕日の映像が流れ出していた。今更ながらこの二人、変態である。

現在登校中（後書き）

正直すまんかったヤモリ殿  
W  
W  
W  
W

## まだ登校開始から数十分（前書き）

ヤモリ殿はあと三回の完全変態を残しているそうです。ごくうー  
ー！！！！早く来て暮れ〜w w

ヤモリ…黒月の高校からの友人。前記の通り、MS、銃器、巨乳好き。彼の友人に彼女持ちがいるので、最近の口癖は「リア充爆死しろ」。心の師匠はクマ吉。



## まだ登校開始から数十分

黒月「そういえば二人はなんの免許とるんだ？一口に免許つつつても色々あるじゃん？」

レイナ「私は特殊工作型普通MS免許。いわゆるステルス機能とか持った機体に乗れるようになるやつ。デスサイズヘルとかブリッツとか」

ヤモリ「俺は赤い彗星専用機総合免許。最初免許取得推進のパンフみたときこれだッ！って思ったわwww」

黒月「ホントにシャアの機体好きなお前。他にはアムロシリーズとかあるんだっけ？」

ヤモリ「アムロシリーズは俺としては好かん。3倍だぞ？！3倍のスピードで背後に回りこんだときなど絶頂すら覚える！！ヤベえ、俺の下半身にいつもの三倍のエネルギーがみなぎってきやがった！！」

レイナ「装甲は紙レベルだけどね、角付けりゃ3倍www」

ヤモリ「表出る変態野郎！！」

レイナ「上等よ変態野郎！！」

黒月「どっちも変態だ！！あとあんま暴れんな。沙慈さんに怒られるぞ？生きてちゃいけないやつなんだ、ここからいなくなれ、って

オーライザーで突っ込んでくるぞ」

ヤモリ「それ違う！！んで、黒月は何の免許とるんだよ？」

黒月「特殊兵器搭載型MS総合免許。平たく言えばファンネル搭載機全般の免許だ」

ヤモリ「お前ニュータイプだったの?!」

黒月「いや、知らないのか？最近一般人でも使えるファンネルが開発されたんだぜ？そうじゃねえとお前もサザビーの免許とれねえだろうが」

レイナ「そういえばそんなニュースもあったわね。変態ジジイ5人と有名な戦争厨開発チームが連携して実現したとか何とか…VIPで見たわ」

ヤモリ「初期のファンネル搭載型ってなんか弱っちそうな外見だったよな。最新作のクシャトリヤとかヘチマにしか見えねえwwww」

黒月「表出るザク厨野郎!!!」

ヤモリ「上等だファンネル厨!!」

黒月は懷に隠していたハリセンを抜刀し、ヤモリはズボンの前の位置をもぞもぞ探り、そこから対艦刀型ハリセンを取り出す!!

レイナ「どっちもどっちよ…あれ？なんかデジャヴ？」

二人「orz」

レイナから予想外に冷めたツッコミでツッコまれ、意気消沈した二人。無駄に体力を使ってしまったようだ。

黒月「ハア…あ、お前ら卒業したらMS何買うんだ？」

ヤモリ「ゼエー…ハア…」

黒月「運動不足の上身体に合わない対鑑刀なんか使って呼吸困難に陥ってるヤモリはほつといて、だ。レイナはどうすんの？」

レイナ「私は…内定決まった会社のためにこの免許とるの。免許さえとってればMS自体は会社から支給されるから…」

何故か浮かない表情で語るレイナ。それほどまでに貧乏なのか？

黒月「そうか。小生はジャンク屋を営んでる友人のツテで自分用のを創ってもらったんだ。さすがに早すぎじゃね？とか突っ込まないでくれよ？」

ヤモリ「つつこむだと?!」

黒月「なんでデメエはそっちの方向ばかりに加速させるの?!脳みそまでエロスに支配されたのか?!」

ヤモリ「何を言っている黒月。俺は自分に正直というポリシーの上で行動しているのだぞ？」

黒月「聞こえはいいけど早い話がエロいことばっか考えてるってことじゃねえか!…はあ…んで?お前は?ヤモリ」

ヤモリ「俺はもちろんシャアザクに決まってるだろ！！魔改造なんかしねえ、あれこそ至高のデザインといえる…」

レイナ「燃費の悪さにも定評あるしね…フッフ…」

ヤモリ「おい

おい」

黒月「最近は大陽炉搭載モデルがやたらと優遇されてるよなあ…減税減税って。そりゃ環境にいいのはわかるけどよ」

ヤモリ「ヘタすりゃ大爆発だけだな。事故った時が怖すぎるわ。ほれ、数年前のあの事件」

レイナ「たしか半径数キロにわたって蒸発したんだっけ？まだ試作段階で無謀なことするからよ」

黒月「もうチョイ考えてモノ創れってな」

ピンポンパンチーン

黒月「何で最後のやつだけおかしいんだよ？！仏壇の前にあるあれの音じゃねえか？！不謹慎だろ！！」

沙慈「もうすぐ教習所に到着します。各自準備してね。小便は済ませたか？神様にお祈りは？内ポケットのチャカはちゃんとある？では、よい教習所ライフを！！」

黒月「ホント心配になってきた…沙慈さんエ…」

よしやく到着である。

まだ登校開始から数十分（後書き）

変態って便利です。何言ってもギャグになりますからWWW

やっと着きました（前書き）

あほネタだらけです。耐性の無い方は撤退してください！！小生がおとりに…

ドカーーン！！

やっと着きました

登校開始からおよそ30分。ついに黒月達は教習所に到着した。まず広い。向こうが見えない。そして駐MS場には教習所の先生のものだろうか。有名どころが所狭しと置かれている。例・ガンダム、サザビーetc...

ガンダム好きなら発狂するところであろう。まさにラピュタである。

黒月「ここが…」

レイナ「モビルスーツ…」

ヤモリ「キョウシュウシャ…」

黒月「盛大に噛んでんじゃねえよ」

ヤモリ「失礼噛みました」

黒月「ちがうな、わざとだ」

ヤモリ「かみまみた!!」

黒月「わざとじゃねえ?!」

ヤモリ「カクリコン!!」

黒月「原型が無え!!」



レイナ「不憫な髪形してる人ね。悲しいけどこれ、遺伝子なのよね…」

黒月「遺伝以外のハゲもあると思うがな。どれにしるあんな風にハゲたくねえ」

カクリコン「ほう、貴様はけんかを売っている、そうとらえていいんだな？」ピキピキ

黒月「って小生の友人が言ってました。その友人はもうこの世にいませんが…」グスン

カクリコン「おお…そうだったのか。それは…すまなかったな…  
…あれ？」

カクリコンが気がついたときにはもう3人の姿は無かった…

レイナ「まさか本物が出てくるとはね…さすがの私も心臓ドキドキだったわ…こんなにドキドキしたのは黒月のトイレを覗きに行っ  
て以来ね…」

黒月「オーケー表出る変態!!」

レイナ「可愛い息子さんね…戦闘時はどうなるかをまた見せてほしいわ」

ヤモリ「息子といわれてこの俺が出て行かないわけもあるまい！！私の精力は53マン…」

黒月「ストップだ！！言わせねえよ？！なんでそこをカタカナにしたの？！なんかゾクツとしたわ！！あとレイナは確実に×る」

レイナ「フッフ…変態に攻撃なんて…通じると思って？私は変態属性のみならず…（以下省略）…さえ持ち合わせている女よ？つまり！！あなたの攻撃は全て私にとってはアメとなる！！私にはムチでさえご褒美なのよ！！」ババーン！！

黒月「話進まねえから先行くぞ」

レイナ「あん／／／」

ヤモリ「あっあ／／／」

黒月「もうやだこいつら」

受付に行き手続きをする3人。ちなみに受付嬢はセイラさんだ。

セイラ「それじゃあ細かい手続きはこれでおしまい。がんばってね！少なくとも軟弱者にならないでね！」

3人「はい！！（もし軟弱者認定されたらあの地獄ビンタが…）」

黒月「最初の時間は講義だったな。誰が担当なんだろう？」

ヤモリ「俺は巨乳であればなんでもいいよ」

黒月「だまれこの場でジャンクにしてやろうか？」

レイナ「ジャンクですってえ?!」

黒月「?!どうしたレイナ? 様子が変わぞ?」

レイナ「…はっ!! 私はナニを…?」

黒月「だからナニをカタカナにするんじゃないやねえ!!…あつ、ここに講師のリストが掲示されてんな。…そうそうたるメンバーじゃねえか。赤い彗星に青い巨星、ソロモンの悪夢から不可能を可能にする男まで…」

レイナ「…ねえ、この娘達も講師らしいよ?」

ヤモリ「つるぺたに用はねえ!!」

黒月「やかましい!!…とりあえずいくぞ。最初は3人一緒の教室だったよな?」

3人は教室を目指して階段を上り始めた。

やっと着きました（後書き）

正直すみませんでした（何回目だろこれで…）

やっとらしくなってますよ（前書き）

やっと授業が始まります。中々話が進まない。なぜだ？

ヒントは変態二人組が勝手に暴走してくれているので話が進まないこと！！

やっとらしくなってますよ

黒月「着いた、この教室のようだな」

ヤモリ「コヒュー……コヒュー……」

レイナ「ねえ、ヤモリ君呼吸困難になってるわよ？」

黒月「あ！あそこにメタギアのエヴァ（巨乳美女）がいる！」

ヤモリ「わが世の春がきたアアアア……」

黒月「ウ・ソ」ニツコリ

ヤモリ「ぶべらげちょー！」ゴツプアー！

レイナ「盛大に吐血して気絶しちゃったわよ？」

黒月「ほっとけギャグ補正で数コマで治る。第一ガンダムつつてんのメタギア出してどうすんだよ」

講義室！！

黒月「広いな、講義室」

レイナ「新入生は私達だけじゃないみたいね、当たり前かもしれないけど」

ヤモリ「ちつ、どいつもこいつも貧相だ…やはり俺はD以上がいい…リンの生み出したエロスの極みだよ…」

黒月「あんまパロディ過ぎると怒られるぞ？（保身的な意味で）」

そのとき、ガツン！！と大きな音が響いた。その直後、講義室の引き戸がガラガラと音を立てて開いた。ちなみに時代設定は近未来だが、ドアは引き戸である。講義室以外では全て自動ドアなのに。間違えて顔面から激突する人（講師含む）が後を絶たない。

？「講義を始める。各自席に着け」

威厳たつぷりの声を響かせながら入ってきた講師はアクシズの総帥、ハマーン・カーンその人だった。

なぜか鼻の頭がほんのり赤い。若干涙目だ。今日も相変わらずのおっぱである。作者としてはストレートのセミロングぐらいが一番いいんじゃない？と思ったりする今日この頃

ヤモリ「なア黒月」

黒月「なんだ？」



ヤモリ「確実にあの人引き戸にぶつかつたよな？結構な勢いで」

黒月「やめとけ某ハマーン狂信者が襲撃をかけてくるぞ？」

ハマーン「その二人！！何を喋っている！！」

黒月・ヤモリ「ハイッ！！すんませんでしたあ！！」

レイナ「先が思いやられるわ…って次話につながりやすい言葉でしめておきましょうか」

黒月「いやまだ続くよ？こういうときは…」

黒月・レイナ・ヤモリ「ここでいったんコマーシャル！！」キリッ

らーっらららーらっららららっらら

スメラギ「銀麦冷やして待ってるからー！！」グビプハアー

アレルヤ「もう飲んどるやん…俺の分無いやん…」

ボーラーレ ウォーオ カンターレ ウォオオオ

アリアル「かー！！！！やっぱ夏はこれだぜエー！！」

ブライト「ユウヒィ…スウパアドウラアイ！！」

黒月「なんで酒のコマーシャルばかりなんだよ!!」

レイナ「お酒の勢いで……アリね」

ヤモリ「クロツキくん、なんだか火照ってきちゃった」チ  
ラリ

黒月「てめえらがっ!!泣くまでっ!!殴るのをっ!!やめねえ!  
!」ゴスベキメキ

変態二人「アーーーーーッ!!」

作者「本番始まるぞ、じゃれてねえでとっと配置付け」

3人「ういーす」

見敵必殺、それ唯一の理（ことわり）（前書き）

相も変わらず暴走しっぱなし。感想にネタ書き込むと採用されるかもしれないよw w

## 見敵必殺、それ唯一の理（ことわり）

ハマーン「それでは教科書の第3章、18ページを開け」

モブ新入生「かったりい…」

モブその2「ちょっとジュースカってきていいスカ？」

プチッ

モブ1、2「へ？」

バーーン！！

ハマーン「私をなめるな新入生！！私は指示は下したぞ！！何も変わらない！！読本習得！！読本習得だ！！学ぶことから逃げもせず！！隠れもせず！！全身全霊で学んで見せろ！！MSの全ての知識を脳に叩き込み！！習得し！！活用しろ！！」

黒月「なんとも素晴らしい…それでこそ最後のイチジクの花…」

ヤモリ「ヤバイなんか黒月が毒されてる」

レイナ「あんな禍々しい笑い顔の黒月くん初めて見た…」

ハマーン「いいか？宇宙でのMS運用は地上よりも更に大きな危険が伴う。私もキュベレイに乗っているときに、後ろから隕石が飛んできて後頭部のアンテナを折られたことがある」

黒月「なんか説得力あるよな。ものすごく」

ハマーン「アステロイドベルトまで行った人間が戻ってくるというのは…」

ヤモリ「（なんだかんだで不憫な人生送ってるよな、この人…）」

レイナ「（ここではきつと報われるわよ…ハマーン様…）」

マッシュマー「ハマーン様ハアハア…」

黒月「せんせーい、机の下にゴミがあったので〜ときますね」

ハマーン「欠片も残すなよ？」

黒月「ローエングリン、てえー！ー！ー！ー！ー！ー」ボッコス！！

黒月の全力ニーバットが変態の顔面にヒット！！5回当たった！！

レイナ「エロスー！！」

レイナは呪文を唱えた！！ヤモリの口から稲妻が放たれた！！

+ < 変態 「ぎゃあああああああ！！！！！！」  
キラーン

黒月「見敵必殺！ ミッションコンプリート 任務完了」

レイナ「新しい呪文が本に浮かんできたわ！！」ペカー！！

ヤモリ「ウヌウー！！ブリより肉のほうがいいのだ！！（いろんな意味で）」

ハマーン「私とてそれほど礼儀知らずではない。例には礼を尽くす」

ハマーン様との高感度が上がりました！！

変態二人は別の授業に行ってますってタイトルなげえ（前書き）

ちやっちやか書けるときは書けるんですけどねえ…

変態二人は別の授業に行ってますってタイトルなげえ

2時間目!!

黒月「次は小生一人。あの変態どもはそれぞれ別の授業へ行つた。やっとツツコミから開放される…たまには一人で心を落ち着けたいこともあるさ。誰もいない廊下は静かでいいよ」

説明口調なのは仕様である。

プル「ぶるぶるぶるぶる……!! あっはははは」

そばをエルピー・プルが元気に駆け抜けていく。廊下で走るな。廊下では静かに。

黒月「そっぴや次の授業の先生誰だろ? 確かファンネルについての講義だったような…」

プルツ「待てったらプル!! もう…… (私もあんなふうになれば……) ……ぶるぶるぶるぶりゅ……」



黒月「（囁んだ…）」

プル「（囁んだね…）」

プルツ「っ…そこのお前！！それにプル！！今見たことを忘れる！！！！全力でだ！！！」

黒月・プル「（やだなにこれカワイイ）」

赤面し、じたばたしながら涙目で突っかかってくるプルツ。ヤバイ。抱きしめてナデナデしたい。すると廊下の向こうのほうから赤い何かがこちらに迫ってきた。

フロンタル「ふるふるふるふる……フハハハハハ！！！」

赤い彗星の再来と呼ばれたあの男が。フル・フロンタルが。変態の代名詞になりかけている仮面をファッションだと言い張るあの男が。さっきのプル達と同じように。それはそれは美しい、完璧なまでにブーンのポーズで。目の前を通り過ぎていった。

黒月「諸君、戦争の時間だ」ジャカコッ

プル「手伝うよ。二人で殺ったほうがいいでしょ？」ジャキッ

プルツー「(やだなにこれ怖い)」

彼らは立ち上がった。己の夢を護るために。己のプライドを、アイデンティティを護るために。萌えという概念を踏みにじったあの男に。憤怒の一撃を食らわせるために。

漆黒の月と。赤黒の双子<sup>ジミニ</sup>は進む。目の前の敵を打倒するために。進撃を始めた。

プル「さて、ゴミくずを掃除し終わったところで授業を始めようか」

プルツー「(最近プルが黒い…合ってるっちゃあ合ってるけど…)(機体の色的な意味で)」

黒月「つかこんな広い講義室なのに授業受けてんの小生だけか？シユール過ぎんだろ」

プル「じゃあ改めて！私、エルピー・プル！よろしくネ」

プルツー「……プルツーだ」

黒月「黒月です。こちらこそ、プル姉妹」

変態二人は別の授業に行ってますってタイトルなげえ（後書き）

返事が無い。ただの屍のようだ…

スーパーそげぶタイム入りました〜（前書き）

ヤモリ「黒月よ!!」

レイナ「私達は帰ってきた!!」

黒月「土に還れ」

スーパーそげぶタイム入りました」

黒月「ファンネル操るのがあんなに難しいモンだったとは…どうりで小生以外の受講者がいないわけだ…一般人は定理まで理解しなきゃならんのか…」グデ」

プル「ニュータイプだったら早かったんだけどね。行けて欲しいすれば飛んでってくれるだけなんだけど。本能的に操れるわけじゃないから余計だよな」

プルツ「強化人間も結局はニュータイプの模造品だからな。私も最初は大分手間取ったよ」

黒月「模造品とか言うなよ」

プルツ「え？」

黒月「クローンだろうが強化人間だろうがニュータイプだろうが、そんなモン関係ないだろ。クローンにだって個性が出るもんなんだぜ？現にプルツはプルとは見た目はそっくりでも、大分中身に違いがある。」

自分を形だけパクったような模造品と一緒にするんじゃないよ。もっと自分に自身持ったほうがいい。他の強化人間もまた然りだな」

プル「そうだよプルツ。なんたって私はあなたで」

プルツ「お前は…私だったな…」

黒月「いいぜ…プルツーが一個人として見られないってんなら…」

プル「まずはそのふざけた幻想を!!」

黒月・プル「ぶち殺す!!」ビシィ!!

プルツー「ありがとう、二人とも…（私こんなに幸せでええんやろか…）」

ヤモリ「ええ話やなー」グスン

レイナ「これがそげぶ…胸熱過ぎるわ…」

黒月「そげぶといったら全力パンチ。丁度ターゲットが現れたしいつとくか」

ヤモリ「ちょっとまでそのりくつはおかし…」

黒月「いいぜ…まずはめえのふざけた存在をぶち殺す!!」

ヤモリ「ただの殺人やんそ…」あべしっ!!」

アハハハハハハハ…

グレミー「青春やなあゝ…はっ！！私は！青春を捨てるといいなが  
「…」

レイナ「なんかいるけどどうしようか？」

黒月「全員であいつにそげぶしとく？」

一同「さんせい」

その後、その辺り一体にマザコンの悲鳴が響いたそうだ

スーパーそげぶタイム入りました〜（後書き）

そげぶ〓そのふざけた

幻想を

ぶち殺す

の略。基本的に長い説教のあとに使われる。乱用すると説教臭いと思われるのでここぞというときに使ってみよう



あれ？これってコメディ小説だよね？（前書き）

タイトルからして不穏な空気が流れ始めてるよ大丈夫かな回収できるかなどうしよう

あれ？これってコメディ小説だよね？

黒月「先ほどもそうだったが、3人の授業時間はそれなりにバラつきがある。例えば小生がファンネルの授業を受けている間、ヤモリはシャアによる赤い彗星流・MS格闘術の講義を受けていたし、レイナはニコルによるミラージュ・コロイドの講義を受けていた。

更に言うなら小生が講義を受けているときに、ヤモリは受けるべき講義が無く、休憩室でポテチを頬張るということもある。まあそんなことがあって今小生たち3人は合流の後、昼休憩に入ったのだが」

レイナ「……zzzz」

ヤモリ「……zzzzzzzz」

黒月「説明終わったから起きろ二人とも。この先のレストハウスで飯食うぞ」

レイナ「お腹すいた……」

ヤモリ「おお、身体が肉を求めている……」

黒月「深く考えないようにしよう、キリがねえ……」

レイナ「あ、ちょっとお花摘みに行ってくるから先行ってて」

ヤモリ「俺も色々摘んでくるから待ってて」

黒月「ガマンしてたんならとつと行つて来い、ただしヤモリ、テーマはダメだ。性犯罪が起こりそうな気がする」

ヤモリ「…………俺はそこまで下衆じゃねえよ?!」

黒月「今の間はなんだよ今の間は?!」

男どもが馬鹿な会話をしている間に廊下の向こうのWCのマークに向かつてレイナは走り出していった。

黒月「俺たちは先に行くぞ。あいつの席もとつといてやんないと」

ヤモリ「男ツンデレは流行らねえよ黒月」

黒月「…………お前つてドナー登録してる?」

ヤモリ「チョット待て目が据わつてるよ何するのその懐からナニを出そうとしてるのなんか黒光りするなんかが出てきてるような気がするよ残鉄引かないでヤメテ止めて…ぎゃああああ!!!!」

女子トイレ

レイナ「……………」

洗面所に佇むレイナ。胸のペンダントを握り締め、険しい表情で何かを思案しているようだ。黒月たちといるときの表情のギャップが激しすぎる。

？「哀しそうね…」

レイナ「?!…誰？」

入り口から儚げな雰囲気少女が歩いてきた。

ティファ「…一人じゃ解決できない事だつてある…本当に苦しくなったら、誰かに頼ることも必要だと思う…」

レイナ「っ…ご忠告痛み入るわ」

ティファ「気にしないで。私は皆に笑ってほしいだけ。さっきのあなたの笑顔、素敵だったよ？」

そういつて個室に入つていったティファ。場所が場所なのでなんとも締めがない気がするのは気のせいだろうか。レイナは苦笑いするしかなかった。

レイナ「…それでも私は…」

レストハウス前

黒月「ここだな。味、量、値段、どれをとっても一級品と名高い」  
食事処・ギム」は」

ヤモリ「だったもの」「オチが読めてるような気がするんだが？」

黒月「肉塊にモザイクかけんのもめんどくせえからとつとと再生し  
やがれ、この小説を18禁にする気か？（グロ的な意味で）」

ヤモリ「違うほうなら大歓迎なんだが？」

黒月「…なあ」

ヤモリ「？」

黒月「一応R15の表示つけたほうがいいかなあ？」

ヤモリ「ギリギリセーフなんじゃね？」

難しいところである

あれ？これってコメディー小説だよね？（後書き）

どうでしょう変態二人のせいでR指定すべきかどうか迷ってます  
…

やっぱり予想通り（前書き）

黒月「ミリアルドさんが鼻毛で戦ってる夢を見たことがあります」

ヤモリ「マジホントどうでもいいな」

レイナ「ガン免はーじまーるよー」





包丁を指先でくると回転、回転の勢いで空中に放る。落ちてきたところには包丁収納用ポケットがあり、見事にそこに収まった。

レイナ「すっごい…」

ヤモリ「御代将っていう言葉がここまで似合う男は早々居ないだろうな…」

ギンガナム「お褒めの言葉として受け取っておくぞ！！さてえ！！ご注文はそのメニューから選んでくれたまえ！！小生が腕によりをかけて丹精こめて料理を作り上げてやるぞお！！」

黒月「一人称が被ってる…小生のアイデンティティーが…」

レイナ「すっごい豊富なメニューだね…和洋折衷って単語じゃ表現しきれないくらいだよ？うーんと…私はニシンのグリルパスタで！！」

ヤモリ「から揚げ定食肉2割り増しで」

黒月「天心麺で」

ギンガナム「りょーかいいい！！刹那あ！！ティエリアア！！食

材の準備をしるお！！」

ギンガナムが店の奥に声をかける。すると店の奥から只者ではないオーラの二人が登場した。

刹那「刹那・F・セイエイ！目標のニシンを確認。調理を開始する！！ここはっ！！俺の距離だっ！！」ズババババ

ティエリア「鳥胸肉を状態を確認。下味の準備は終了。品質、状態、全てにおいて調理に値する！！これよりから揚げの調理を開始する！！」ジユワアー

すさまじい速さで調理する二人を3人は啞然として見るしかなかった。刹那は胸に？<sup>ハートマーク</sup>LOVE GUNDAMと書かれたエプロン、ティエリアは紫を基調としたとても可愛らしい花柄のエプロンをきて調理に望んでいる。

ティエリア「同時進行で天心麺に使われる天心の部分の調理を開始する。刹那、フォーメーションT（天心麺）だ！！」

刹那「了解した！！GNソード（ただの包丁）！！ネギ、きくらげ、ニンジンを規定内の大きさまでカット開始！！ううううおおー！！！！」ズガガガガ

ティエリア「天心麺に使われる麺の湯通しを開始する。麺湯で機、

計器に異常無し。温度、規定の範囲内。麵、投入！ゆでの工程を開始する」グツグツ

レイナ「……………」

黒月「圧倒的過ぎて言葉も出ないな…」

ヤモリ「そんなことはどうでもいい！ティエリアさんの性別に明確な答えを求める！！女性ならば3サイズを！！そして毎朝俺から揚げを作ってください！！」

黒月「KYはなはだしい質問してんじゃねえ！！皆が気にしないようにしてきたことをぶり返しやがって！！小生だって若干気になったことぐらいあるわっ！！…あれ？」

レイナ「中性的ゆえの弊害ね…私は両刀だから大丈夫よ？」

最後の最後でとんでもない発言が飛び出したような気がするが、気にしないでおこう

## やっぱり予想通り（後書き）

にわかなんで知識が浅いのは許していただきたく候…

## 御代将の味付け（前書き）

沼「次々と食材を調理していく二人。味付けは御代将。その味付けやいかに?!」

黒月「お世話なってます」

レイナ「マジで誰よ？」

ヤモリ「常連さんだ」

沼「ガン免、はーじまーるよー」

## 御代将の味付け

ギンガナム「とどめの味付けはあ！！小生担当だあ！！行くぞお！！」

指の間に調味料の入った入れ物をはさみながらギンガナムは構える

黒月「きつとあの二人以上にすごいんだろうな…」

レイナ「覚悟しておかないと着いていけなくなっちゃう」

ヤモリ「見せてもらおうか…食事処・ギムの店主とやらの実力を！！」

ギンガナム「ううううううおおおおおお！！！！」

激しい気が辺りに立ち込める。そこに居た人全員が息を呑んだ。そして…

御代将は机の下から超精密電子天秤を取り出した。

3人「え？」

ギンガナム「グラムまで…ナノグラムまで…ピコグラムまで…」

めっちゃ繊細な動きで塩を測り始めたのでした。彼の軽量スプーンを持つ指先は、生まれたての小鹿のようにプルプル震えていました。

黒月「思ったより繊細だ…」

レイナ「思ったより繊細ね…」

ヤモリ「普段からは考えにくい測り方だ…」

ギンガナム「やかましいぞ脂肪の塊！！声の振動で正しく測れねえだろうがぁ！！」バキィ！！

ヤモリ「ピンポイント俺爆撃ですかぁ？！」ゴパァ！！

黒月「（ヤモリ…お前の勇士は忘れねえ…ヤモリは犠牲になったのだ…）」

レイナ「無茶しやがって…」

ティエリア「さて、僕たちは奥でガンダムVSガンダムネクストプラスでもしようか」

刹那「俺が！俺たちが！！ガンダム……」

ティエリア「おゝなががなくからかえろ」

刹那「スルーかよ」

なんだかんだで出来ました

黒月「おお…この麵のつるみ…そしてこのスープのまろみ…そしてこのまろみ…」ずるずる

ヤモリ「意外とボキヤ貧なんだな。ツツコミでボキヤ貧って致命的じゃね？」ガツガツ

レイナ「このニシンのしょったり具合がたまらないわね…」チュルチュル

ヤモリ「こっちはこっちでなんかわけのわからんこと言い出したぞ？！」

黒月「この味のリーズナブル具合が最高だ…」

ヤモリ「なにが？！絶対使いかたちげえだろ！！もっと違う言い方できねえのかよ」

黒月「じゃあ…アズナブルだな」



ヤモリ「そこはシャアにしるよ…っていつの間に俺がツッコミに？」

黒月「小生がボケに！」

レイナ「私もボケに！」

黒月「ボケが二人で…」

二人「もはや逃れられんぞ……！」

ヤモリ「黒月の苦勞が分かったような気がする…いつもすまねえなあ…黒月」

黒月「分かればいいんだよ」

御代将の味付け（後書き）

沼さんすんません…w  
w  
w  
w

今日はここまで、各自明日に備えてよく眠るようにつてタイトルなげえ（2回目

パイナップルうめえ W W W W

え、もう始まってんの？

沼「会話で文字稼ぎな第12話、はーじまーるよー！..」

黒月「スタッフ、しっかりしろよ...」

今日はここまで、各自明日に備えてよく眠るようにつてタイトルなげえ（2回目

いつのまにか外は夕焼け。美しい茜色の光の中、3人は今日1日を振り返る。

黒月「今日の授業はここまでか。いやはや濃い時間だった」

ヤモリ「俺も帰るか。新作のエロゲーg…」

レイナ「私はもうちょっと残ってくわ」

黒月「そうか。それじゃ明日な」

ヤモリ「そのゲームがさア、巨乳が咲き乱れ…」

レイナ「あ、どうせだったらメルアド交換しといてくれない？ちゃつと終わらせちゃお」

黒月「ああ…んじゃあここにメルアド書いとくからメールしてきてくれ。イフオンは赤外線がねえんだよ」

レイナ「わかった。後で連絡するね」

ヤモリ「あれ？なんか俺だけハブられてね？」

黒月「あ、ミア・キャンベル発見！」

ヤモリ「おねいさ〜ん！！俺と一緒に秘密の花園に行かないかい

?!」ドドドドドドド

レイナ「ほんとにミリアさんだったの？」

黒月「いや、確かさっきあっちの方向に、青いツナギ来たいい男がベンチに座ってたんだ。多分ダウトだろうな」

レイナ「さよならヤモリ君の処女…」

アーーーーーッ……!……!アーーーーー……!……! エコー

黒月「それよりさっきの走り方と言動、某五歳児を思い出すな。戦国大合戦はよかった。最後小生泣きかけたもん」

レイナ「あれ以来若干不作なんだよね…まあいいや。じゃあ明日ね」

黒月「さいなら」

行きと同じく沙慈さんに送ってもらう。なぜか若干つやつやしているヤモリと合流し、オーライザーに乗り込んだ。

黒月「たった一日で10話近く使うことになるとはな」

ヤモリ「おい！…そっぴゃ黒月、若干口元が緩んで…いや、ゆがんではいるぞ？」

黒月「言い換える必要性無かったよな？！…そうか？あとなんでお前がつやつやしてんだ？」

沙慈「今日一日、大分濃かったようだね。免許取得がんばって！僕も応援してるから」

黒月「ういゝす…って前見て運転してください沙慈さん！！前からアッシマーがきてるって！！」

夕焼けの中、いつもより若干機嫌のいい小生といつもより若干テン

ションが低いヤモリは帰路に着いた。

カタカタカタカタ…

教習所に備え付けられたパソコンをいじっているレイナ。目に生気がない。

チエーン「何してるの？そこの君？」

レイナ「ああ、ちょっと免許取得のための練習問題をやっていただけですよ」

チエーン「がんばってね、応援してるから。いざとなれば私が補修してあげるわよ？じゃあね」

レイナ「はい、ありがとうございます……今日はこの辺にしときましょうか……」

チエーンが去った後、パソコンからUSBを引き抜くレイナ。USBの発光端子が妖しく光っていた。

レイナ「悪く思わないでほしいわね。これも歴史の中で起こる必然なのよ？」

その目には深い深い悲しみの色が浮かんでいた…



今日はここまで、各自明日に備えてよく眠るようにつてタイトルなげえ（2回目

コメディーじゃなくなってきたね？って思ったやつ！！危ない！！  
後ろにあべ…

## とある黒月の災難記録（前書き）

やりたかったネタを一発。ちなみに沼さんはご飯食べておねむの時間なのでいません

つか怒られそうなので自重してます（作者が）

## とある黒月の災難記録

次の日!!

黒月「ムニヤ…って言葉は最早寝ているという行為を表すに欠かせない言葉だよなあ…ムニヤ」寝言

ビー…!ビー…!

突如部屋の中に警告を示すアラートが鳴り響く…!

黒月「うわっ?!...誰からの電話だよ...」

着信音でした（ちなみにリアル）

プル「あ、黒月くん？馬鹿だから補修でゝす」

黒月「.....不幸だ...」

世知辛いが、しょうがない。気分を変えるために身支度をしようと台所に向かう。

プルツ「この卵焼き、美味しいな...」

マリーダ「プルツ、それは卵焼きではなく出汁巻き卵です」

黒月母「マリーダちゃん正解ゝよかったわ口にあったようで」

黒月「.....」

黒月母「じゃあお母さん会社いつてくるからあとのことよろしくねゝお兄ちゃん」

黒月「そっぴや弟は？」

黒月母「友達とどこかへ出かけたみたい。夕飯までには多分帰るって。じゃあ行つてきまゝす」

黒月「行つてらっしゃーい。…じゃねえ！！なんで朝起きたら先生二人が来てるんですかあ？！…ってもうあのババア居ねえチクショウ」

プルツー「おはようクロツチ」

黒月「人をオサレ漫画のフリーザ声のマッドサイエンティストみたいに呼ぶんじゃない。小生の名は黒月だ」

プルツー「し、失礼、噛みました」

黒月「ちがう、わざとだ」

プルツー「か、かつ…かみまみた！／／／／」

黒月「わざとじゃない？！」

プルツー「かみやきたん？」

黒月「ティイイイエリアアアアア！！！！」

マリィダ「本題に戻ります」

黒月「容赦ないな、マリィダさん…」

マリダ「プルツーは元はといえば、戦闘用強化人間として作られたクローンです。ゆえに人こうして普通の会話をするなどの行為をするのに全くといっていいほど慣れていません。ぶっちゃけ戦争ばっかしてたらコミュニケーションになってました」

黒月「仮にも先輩だろうがよ…」

マリダ「年齢的には私のほうが上です（多分）それを解消すべく教習所で人懐こさに定評のあるプル教官の補佐として在籍しているのですが…」

黒月「？」

マリダ「前に授業が終わった直後、一瞬にして姿を消したと思ったら自分の部屋でプチエヴァやってました」

黒月「oh…」

プルツー「だ、だって知らない人と会話するなんか怖すぎるし恥ずかしいし…」

黒月「なるほど理解した」

心の中で小生はこう思った。…不幸だ…

## とある黒月の災難記録（後書き）

ユニコーン見てないのでマリーダさんのキャラが分かりません。と  
りあえず敬語ですwwww

## クローンの意味で（前書き）

お久しぶりです。やっぱり夜勤やってると進めることが出来ません…  
ご容赦を



## クローンの意味で

黒月「んで？具体的には小生に何してほしいんだよ？」

マリィダ「ここまで話したのにまだ何をすべきか分からないのですか、とマリィダは露骨に鈍感なあなたを馬鹿にしたような口調で諭します」

黒月「その口調止めろ！！プルツィからもなんか言ってくれ！！」

プルツィ「マリィダ、ちょっとは自重しなきゃいけないよってプルツィはプルツィは諭してみる」カァァ／／／／／

黒月「恥ずかしがるくらいならするんじゃないやねえぞ？…とりあえずプルツィがコミュ障脱却できるまで協力しろってのか？」チラチラ

マリィダ「そうです、とマリィダはカンペでやっ和本筋が見えるよ  
うなあなたを馬鹿にしたような調子で答えます」

黒月「その口調止めろつての！！つか、何で小生なんだよ。女の子同士ってことでレイナやプル辺りでもよかったんじゃないか？」

マリィダ「プルはテンションが高すぎてプルツーがついていけません。そして歩く18禁と生まれたての子羊を混ぜたらどうなるかわかりますか？あなたが一番良識人だからですよ。もっとも、この物語の中の面子で、という意味ですが」

黒月「はいダウトオオ！！物語とかいつちゃらめえ！」

んで。

黒月「んで。お前らはどうしたいんだよ？」

プルツー「パソコンはあるか？今週のIS見逃してしまったからな、見ておきたいんだ」

黒月「そんなんばつかしてるから会話が苦手になるんだろうが…」

ブルツ「じゃあデモンベインは…」

黒月「ダメだ！！なにUSBとソフト取り出してんだ！！何が哀しくて小生のパソコンで18禁のエロゲーさせなきゃいけないんだよ！！」

マリィダ「元ネタを知っているということは…」

黒月「ちっげえ！！友人にコアなエロゲーマーがいるんだよ！！そいつとの会話でちよこつと出てきたくらいなんだよ！！」

マリィダ「必死になって隠そうとすればボロが出ますよ？www」

黒月「やかましい！！マジだから！！あと草はやすな！！」

気苦労は絶えそうにないww

クローンの意味で（後書き）

ヤモリ「またハブられた…」

レイナ「伏線回収できるかしら…作者の文章力でいけるかなあ…」

教習所カンケーなくなってきたけどこまけえことは(r y)(前書き)

ブルツーがヲタ化してきました。これは自分なりに心の隙間を埋めようとしてちよつとズレてしまった結果です。しょーがないんやゝしょーがないんやゝこれでもええ娘なんやゝ…

教習所カンケーなくなってきたけどこまけえことは(r y

結局何もすることがなく、ただ街をブラブラ歩くことにしました。  
いふなれば、というかそうとしか言いようのないんだろうが、俗に  
言う散歩だ。

プルツー「うつっ…頭が疼く…」

黒月「はいここで厨二病発祥!!…ってほんとに顔色悪いぞ? 大丈夫  
夫なのか?」

額に手を置いて熱を測る。何故か手を置いた瞬間からどんどん熱く  
なってるような気がするが…

プルツー「ふぁ…冷たい…もつと…」

黒月「お前が小生より熱いだけだ。あれ? なにこのヘンな空気?」

マリーダ「どこぞのフラグメイカーですか。そんな羨ましいことし  
たら誰だって体温は上がりますよ」

黒月「たま〜に空見上げるとき、スゲー広いな〜って思わないか?  
なんか気分が晴れやかになるっつかさ」ポヤ〜ン

マリーダ「スルーかよチクショウ。普段プルツーは外に行きなれて  
いないので外にまだ順応できていないのかもしれないね。

引きこもりがいきなり外に出ると立ちくらみがする、みたいなもの

かと」

黒月「そんなものか。外出たばかりだが、どこか喫茶店でも入って休憩するか」

プルツー「すまにゃい…」

黒月「（囁んだ…）」

マリィダ「（囁みましたね…そして恥らう余裕もないんですか…）」

喫茶・サテン

黒月「ここでいいか」

プルツー「こんな感じのssあつたっけ…」クラクラ

マリィダ「これは本格的にダメそうですね。とっとと入りましょう」

カランカラン…

鉄仮面「いらっしゃい」

黒月「失礼、間違えました」カロンカローン

鉄仮面「ちよつと待つて！！間違つてないから！！お願いだから出て行かないでえ！うちあんま人訪ねてこないのよお！！

お願いやから出ていかんといてえサービスするからあ後ちよつと恥ずかしいものとかも見せてあげるからあお願いやから出て行かんといてえ！！」ズルズル

黒月「しょーがねーなー…分かったよ！！！！」

鉄仮面「う…うん…」シヨボン



教習所カンケーなくなってきたけどごまけえことは（ry（後書き）

悪役は不憫に。不条理には不条理がよく似合いますww

気がつきゃなんじゃこりゃ（前書き）

とつとと教習所戻らないと…（汗）

気がつきゃなんじゃこりゃ

プルツー「んでんでんで？」

鉄仮面「にゃあ」

黒月「ほら、マリーダにはカトラスだ。小生はジャッカルがあるからそっちを使ってくれ」ジャキン

マリーダ「了解しました」ジャコッ

鉄仮面「待つて待つて殺さないでマジで許してください」ドゲザ

黒月「じゃあ小生がパンかって来いって言ったら買ってくることに、あと小生が突撃って言ったら突撃すること、守れないならコテンパンにしますよ？」ニッコリ

鉄仮面「う…うん…どこに突撃するの？」

マリーダ「そういえば黒月さんはどんなとき笑うんです？」

黒月「そうだなあ…例えばいらなくなったものとか（ゴミとか鉄仮面とか）処理してすっきりしたときとかに……笑うだろうなあ……」

< > < > ジー—————

鉄仮面「（ここここ殺される！今からでも遅くない！奥で鍛えてこよう！まずは腕立て伏せだ！）」ドドドド

黒月「おっさんどっか行っただけ注文すらしてない小生たちは無視なんだな」

シーブック「すまないな、僕がいない間にまたあのおっさん発狂したんだね？」

入り口からシーブック・アノーが買い物袋を抱えて現れた。隣にはセシリーもいる。さながら若い新婚夫婦だ。チクショウリア充爆発しろ。

黒月「ええ、ちょっと脅したら店の奥に引きこもってしまいまして……」

シーブック「仕方がない、僕が始末しておくよ。……ご注文は？今からでなければ何か作るけど」

黒月「じゃあ小生はアーモンドトーストとカフェオレで」

ブルツ「オレンジジュース」

マリィダ「私はコーヒーで」

セシリー「分かったわ。ちょっと待っててね」

黒月「（もはや教習所とか関係ないよなあ…今更だけど）トースト  
うめえ」

シーブック「ありがとう。実際このお店僕たち二人で持つてるよう  
なもんだからね」

セシリー「あんなのが父親とは思いたくないけど、仕方のないこと  
なのよ…」ズーン

黒月「いいじゃないですか。身内の恥は書き捨てだつて」

マリィダ「それ、旅の恥は…じゃないですか？…私やプルツーには  
親と呼べるものはありませんでした」

プルツー「ブクブクブクブク

黒月「ストローに息吹き込んでブクブクしないのプルツー。行儀が  
悪い！…親なんか、って言うわけではないが…」

シーブック「それ以上に大切なものを持てばいい…ってか」

黒月「さすが歴代主人公の良識人。やるじゃねえか」ガシッ

シーブック「関係ないような気がするけど、まあありがとう」ガシッ

プルツー「（黒×シーブック？）」

マリーダ「シーブック×黒でしょう。これだけは譲れません」

セシリー「（なんだろう…今とても嫌な予感が…）」

プル姉妹とお出かけ編 終わり

気がつきゃなんじゃこりゃ（後書き）

レイナ「プルツーにツン要素が足りないと思うんだけど」

ヤモリ「次回は俺にスポットライトが当たりますように」

黒月「歩くド変体がなに言ってるやが…え？……え？」

## 漢同士の仁義なき闘争（前書き）

大丈夫、この回で合ってるよ、別に飛ばしたとか間違っ  
て投稿したとかじゃないから…



## 漢同士の仁義なき闘争

黒月「いつかこんな日が来るとは思ってたけどな。ヤモリ」

ヤモリ「諸君。私は銃器、MS、巨乳が好きだ。を提唱するこの俺と不条理を誰よりも憎み、ロリと純愛を愛す！を提唱するお前とは。いつかこうなると思ってたはいたがな」

黒月「どこからどうなっそうなるのかは小生には理解できんな。あとそんなセリフ言ってる。後小生はロリコンじゃない。付き合うなら若干年下のほうがいいってだけだ。純愛と不条理は正解だが。それでは…」

黒月のヤクト・ドーガがビームサーベルを構える。それに伴いヤモリのシャアザクもヒートホークを抜く。

黒月「いざ…」

ヤモリ「尋常に…」

黒月・ヤモリ「勝負！！」

互いにブースト全開で接近する。周りの土が舞い上がり、機体を通った後の地面に軌跡が出来る。

黒月「おおおおらあああああ！！」

思い切り振りかぶったビームサーベルをヤモリ搭乗シャアザクに叩きつける。ヤモリも思い切り切り上げる形でヒートホークを黒月搭乗ヤクト・ドーガに叩きつける。空中でその二つの刃は重なり合い、凄まじい音と共に激しい火花を散らす。バチンと弾けるような音がする。僅かにヤクト・ドーガのほう勝ったようである。

黒月「いける！！」

ヤモリ「どうかな！？」

ヒートホークは押し返され、振り上げられた軌道に帰っていったが、はじかれた衝撃でシャアザクに回転力が加わる。ヤモリはその力を利用し、右足でヤクト・ドーガの脳天に蹴りを入れる。

黒月「がはあ？！」

ヤモリ「シャアザク真拳奥義……！！返しの手（足だけ）……！！」

凄まじい勢いで蹴り落とされる。地面に叩きつけられる直前、ブーストを起動し落下は食い止める黒月。ヤクトドーガの後頭部が大きく凹んでいた。

黒月「やってくれやがる……流石は変態……もとい、シャアザク真拳を継ぐもの……だがッ！！」

ヤクトドーガのモノアイが不気味に揺らめく。

黒月「こつちだつて伊達や酔狂でこんな機体に乗ってるわけじゃない！！おおおお！！」

もう一度強くブーストを起動し、ビームサーベルと盾を同時に構えながら全速力でシャアザクに突っ込む黒月。

ヤモリ「無駄無駄無駄あ！！シャアザク真拳奥義…」

ヤモリがカウンターの構えを取る。

黒月「なんちゃって」

ヤモリ「なに？！」

盾に仕込まれたビームを発射する黒月。完全に格闘用のカウンター  
の構えを取っていたヤモリは正面からそれを受けることとなる。だがそのビームはヤモリの機体に当たることはなく、代わりに持っていたヒートホークが爆発して消える。

あわや、のところでネクストダッシュが功を成し、何とか爆発に巻き込まれずにすんだ。だが、シャアザクの大きな戦力である近接格闘武器が消えてしまった。

ヤモリ「相手の出鼻をくじく戦闘は相変わらずだな、黒月！！」

黒月「ありがとう、最高の褒め言葉だツ！！」

そのまま回転を加えて再度突進する黒月。さながらどこかの電影弾である

ヤモリ「おのれ、このままではッ！！ならばッ！！」

腰にあるグレネードに手を掛けるヤモリ。そのまま突進してきた黒月に投げつけた。

黒月「ぐわアッ？！つく、卑怯だぞ！！」

ヤモリ「堂々と不意打ちしてきたてめえが言えた事かぁ！！」

グレネードの黒煙が消えると、そこにシャアザクの姿はない。

黒月「ちっ、陽動だったか…」

辺りを見回す。突如コックピットに鋭い警戒音が鳴り響く！後ろだ！！

黒月「何？！」

迫ってきたのはザクバズーカの弾だった。とつさにビームライフルを構えるが間に合わず、黒月のビームライフルが爆発した。シールドで何とか被爆は免れた

ヤモリ「シャアザク真拳が使えないなら！！遠距離で戦えばいいじゃない！！」キリッ

黒月「ヤモリ・アントワネットめ…やってくれるわ！！」

それからも遠距離からガンガンザクマシンガンやザクバズーカを乱射してくるヤモリ。黒月は防戦一方だ。

黒月「しょーがねー…見せてやるよ…これが小生のっ…戦いだっ！！」

黒月「蠢け…ファンネル！」

## 決着（ピリオド）

ヤモリ「ええいー！ぞくぶ…いてっ…マジしっこっ、いって！…くっそ…」

不規則に飛び回るファンネルに悪戦苦闘するヤモリ。ザクマシンガンを乱射するが、当たらない。バズーカなんて論外だ。

黒月「モノ、テトラ、<sup>シュート</sup>発射！ジ、ペンタ、<sup>アタック</sup>突撃！」

脳内で複雑な演算式を組み立てながらファンネルを操る黒月。首には演算式組み立てを補助するチョーカーをつけている。でなければ情報を処理しきれず、頭がパンクしてしまうからだ。今現在でも黒月は頭に走る鈍痛と戦っていた。

黒月「（くそったれ…プルツーは毎日こんな痛みを感じながら生きてるってのか？）」

ヤモリ「うおらああああー！ー！」

黒月「なに?!」

あろうことかヤモリは全速力でファンネルに飛び掛っていく。黒月はファンネルにビームを発射させるが、ヤモリのシャアザクはギリギリのところで全て回避し、あろうことかキックでファンネルを破壊してしまった。

黒月「やるじゃねえか、普段の鈍足とは似ても似つかねえ…だが、まだファンネルは残っているぞ…」

ヤモリ「シャアザク真拳超奥義!!!3倍の加速装置!!!」  
チート・スピード

突如淡く赤色に光りだしたシャアザク。その瞬間尋常ではない速さで飛び回り始めた。黒月のファンネルの行動が鈍る。

黒月「(チツ…やっぱまだあんま長い間使えねえか!!!)」ズキズキ  
ヤモリ「iiiiiiiiえあああああ!!!!!!」

銃を捨て、全て近接格闘で戦いだしたヤモリ。スピードがあるなら撃つより殴ったほうが早い。だがその代償は少なからずヤモリにもダメージが来る。

「ヤモリ「グふっ…ザクだけど…（すまん…！持ってくれよ、俺の体！！）」」

黒月「ヤモリの特殊装備、脂肪の鎧のおかげで長時間の3倍速を可能にしてやる…なんて戦闘狂なんだ…」

これが漢おとしの覚悟か……その潔さは、その男がどんな容姿にもかかわらず尊敬に値するものだ。黒月はその覚悟に、心を震わせていた。

ヤモリ「ハア……ハア……」

黒月「決着をつけるぞ！！」

残るビームサーベルを構え、全速力で突進する黒月。

「やもりくううろおおつうきい！！！！！！！！」

黒月「ヤモリRYYYYYYYYYYYYYYYY!!!!」

シャアザクの後ろ回し蹴りがヤクト・ドーガのビームサーベルを両腕ごと吹き飛ばす。黒月はヤクト・ドーガの足のブリストを起動し、サマーソルトキックを繰り出す。シャアザクが大きく弧を描いて地面に衝突する。MSの股関節にあたる部分が粉々に砕け散る。



ヤクト・ドーガは両腕を失い、シャアザクは下半身を失った。

決着が、着いたのだ。

ストーカー「ピ——————！試合しゅ————りよ————  
——————！この勝負、ドロ——————！！互いの機体が大破す  
るまで全力で戦った両選手に、惜しめない声援をお——————！！」

ワァ――――！！！！！！

黒月「終わった…な…フフ…」

ヤモリ「ああ。終わったんだ。はは…それにしても…」

黒月・ヤモリ「よくできたシュミレーションマシンだよなあ…」

## 決着（ピリオド）（後書き）

結局オチはこんなもんです。それが世界の選択だ…  
W  
W  
W

## 大人のカフェ（前書き）

夜勤が開けました。ちよいちよい進めて行こうと思いますふぁいと、俺！！

## 大人のカフェ

プル「お疲れ様〜二人とも。MS操縦の基本はバッチリだね 黒月  
くんのファンネルもなかなかいい動きをするようになったみたいだ  
し」

プルツ「ふん、まああたしのほうが上手く動かせるんだけどな」

黒月「……………」シヨボン

プルツ「あ、え、じ、冗談だ！！ほんとにうまくなったな！！ア  
ハハ…」

黒月「この時期だと海はもう暖かいだろうなあ…クカツ…クカキク  
ケコ…」

プルツ「お、落ち着け！！プル！助けて！」アセアセ

シャア「お前のシャアザク真拳もなかなか上達したな、ヤモリ。だ  
がまだまだ甘い。あの状況なら相手の突進時に再度クラツカーを爆  
発、直後にバズーカを拾って攻撃することも出来たはずだ」

ヤモリ「Gまで再現されてるんで、あんな状況だったら俺盛大にバ  
ーストストリーム吐いてますよ…（胃の内容物的な意味で）」キブ  
ンワルイ

シャア「それにしてもいい勝負だった。かつての阿姆ロとの対決を

思い出す…」

黒月「大気圏外からザクで地球圏降下、もなかなか乙だな…ジハハハハハハ…」

ブルツ「助けてくれ！黒月の笑い方が竹中 人に！！」

教習所にあるシュミレーションマシン。加速時のGからダメージ時の衝撃まで、全てが実践同様に伝わる最新鋭のものである。

（一台の値段〓擬似太陽炉搭載モデルと同じ値段）

今日はそれぞれの講師が側につき、このマシンを使って教習生の実力の上達を見るところものだ。そしてその際に発生したあらゆる戦闘状況などから、ここから起きうる操作ミス、事故、機体のトラブルなどを戦闘後、デイトレードするのだ。もちろん機体の性能の差が出ないように設定はあわせてある。

シャア「ではヤモリ君。君はどんなことに気が付いた？」

ヤモリ「ええっと…左右方向転換時に足のブーストを入れ忘れてしまっ…思うように上手く曲がれなかったときがあります。あと、相手の行動を格闘ばかりだと決め付けて対処できなかったところと

か…」

シャア「ふむ、では黒月くんはどうだ？」

黒月「はい、ファンネル射出時に演算が間に合わなくて…一瞬制御しそこなつたときがあります…あと、ファンネル操つてるときはどうしても機体の制御がお留守になりがちとか…」

プル「ヤクト・ドーガはファンネル操ると同時に近接格闘でも戦える機体だしね。お留守になるのはいただけないよね」

プルツー「まあ今の時代に戦争とかへつたくれもないんだがな」

黒月「それは禁則事項というものだ、プルツー」

黒月「今日はなんか充実してたなあ…シュミレーションとはいえ操縦したからなあ」

ヤモリ「おえっ…うぷっ…」

黒月「そんなんで大丈夫なのか？シャアザクなんかはどっちかってーと近接特化だろ？」

ヤモリ「聞くと見るとは大違いとはこのことか…シャアさんまじすげえ…ちよっとトイレでイッて来る」

黒月「カタカナにすんじゃねえ！！そしてあからさまな悪意入りの文の構成！！」

一旦ヤモリと別れ、次の授業を待つ。何が哀しくて次の授業まで2時間も待たなければならぬのだろうか…ボーーーーーッとしながらなんととはなしに教習所の地図の前に立つ。

黒月「（レストハウスの隣にカフェがあるのか。そういえばヤモリがそこでぐだつたとか聞いたっけ…言ってみるか）」

食事処・ギムの前を通り過ぎるとき、店内から「リ・イ・ナー…！！」「近寄らないでください、あなたのことが嫌いです！早急にどっか引っ越ってください！」「もうかわいいなあなでさせる抱きつかせるー！！」「キヤーーーーー！！」「やかましいぞお！！アホ毛！！」

……今回は無視だ。話が進まん。そして目的のカフェに着いた。店名は…

コーヒー屋さん



黒月「不思議とデジャヴを感じる店名…」

漂ってくる香ばしいコーヒーの香り、最新鋭の技術を駆使して創られた教習所だというのに、店の造りはアンティーク感漂う木製。落着いた、大人の空間といった雰囲気だ。なんというか…小生みたいな若輩者が入りにくい空間といったところだろうか…だからといって2時間も待機室に居るのはあまりにも味気ない。覚悟を決めて入る。

カランコロンカラン

？「いらっしやい、ようこそコーヒー屋さんへ。まあ適当にかけてくれ」

聞こえてきたのは低い、落ち着きのある声。ダンディズムというのはこの声のためにあるのではないだろうか。カウンターでアナベル・ガトーがグラスを磨きながらこちらに挨拶をしてきた。

黒月「お、お邪魔します…」

ガトー「フフ、そう硬くならなくていい。ここは空間こそ大人っぽい、一度入れば誰でもゆったりくつろげるをコンセプトにしているからな」

黒月「一度入るのにどれだけ覚悟があると思ってんですか…小生みたいなガキにはハードルが高すぎますよ」

ガトー「はは、そうかもしれないな。だがそっちのほうをみて見る」

黒月「？」

指差す方向は店の奥。若干覗き込む様にして見てみる

コウ「くそつたれ…なんで僕の注文には必ずといっていいほどカキ  
ヤロットが付いて来るんだ…グスツ…ガトオオオオオオ！！…コー  
ヒーになんでニンジンに混入させるんだああア！！！」

黒月「……………どっちもニンジン嫌いだったっけ…（野菜的な意味と  
人物的な意味で）」

ガトー「あれはただの嫌がらせだ」

黒月「ガトーさんマジ鬼畜…」

ガトー「とりあえず座りなさい。サービスのレーションだ」

黒月「大人のカフェでなんで軍用の非常食が出されるんですか？！」

ガトー「おつとすまない、君はカロリーメイト派だったかな？」

黒月「確かにレーションと比べたら旨すぎるかもしれませんが…  
まさか即席ラーメンは腐ってる、なんてオチは…」

ガトー「ハハハ、そんなわけ…ちょっと見て来る」

黒月「（雪、ダンボール…）つか即席ラーメン出すのかよ…」

ガトー「私の友人がとある2速歩行型の起動兵器を作ったといつてな、見に行ったときがあるんだが…レールガンや核弾頭まで装備しているなかなか高性能なものだったな」

黒月「小生はあまり詳しくはありますが…水中型も開発されたとか？それって水中用普通MS免許でいけるんでしたっけ？」

ガトー「MS免許枠とは違うから乗れないな。まあそれに乗るくらいならアツガイやズゴックのほうは使い勝手があるだろう」

黒月「身も蓋もない…」

そんなこんなで時間はあっという間に過ぎていく。嵐の前の静けさ、とは思いたくはないが。

## 大人のカフェ（後書き）

黒月以外のキャラがどんどんはぶられていってます。どっしりっ

どうした?! 応答してくれ!! ス… (前書き)

大塚さんネタのオンパレードになります。覚悟してくださいww

どうした?! 応答してくれ!! ス…

ドカアアアアアン!!!!

黒月「どうわあああ?!!?!! なんじゃいなんじゃい?!!」

ガトー「ッ…! 何が起こったというのだ?!!」

コウ「ぎゃあああコーヒーあつちいいいい!!!!」

「緊急警報緊急警報!! 第2訓練場にて訓練用のオートマトンが暴走、訓練用オートマトンが暴走!! 直ちに皆さんは避難してください!!」

それきり館内放送は途絶えた。地響きのたび電気がチカチカする。

黒月「えろいことに…もとい、えらいことになった!!」

ガトー「第2訓練場というところ…ここと廊下で直結している! 非常にマズい、ともかく避難だ、早く出口に向かって走りなさい!」

コウ「た、大変だ!!」

コウ・ウラキの顔がどんどん青ざめていく

黒月「ど、どうしたんですヘタレ王子!?!」

コウ「だまれええ！！俺は誇り高き戦闘みん……」

ガトー「とつとと話せやニンジン攻めにするぞ」

コウ「避難所へと続く道の侵入者用対核シャツターが降りてしまっている！！僕たちは取り残されてしまったんだ！！」

黒月・ガトー「な、なんだつてえええええー！！！！！！！！！！」

ガコンガコン…ズガガガガ

遠くから何か重いものが銃器を乱射しながら迫ってくる音が聞こえた。

黒月「迫ってきてるよ迫ってきてるよえらいこつちやあああ！！！！」

ガトー「仕方ない……久しぶりにだが、生身で戦うしかあるまい。やつらのセンサーは熱探知式だ、隠れていても無駄だろう」

コウ「ガトー！銃、もしくは爆薬はあるか？！」

ガトー「ああ、店の冷蔵庫のロックを解除すると奥に空間が開く。そこに傭兵時代使っていた武器が貯蔵してある。君もついて来てくれ」

黒月「冷蔵庫に銃器入れてんすか…ハラ括るしかねえか…やってや

りますか！」

え？突っ込みに使ってた銃を使えって？ムリムリ、あれモデルガンだもん

ガコンガコン…

一体のオートマトンが辺りにレーダーを張り巡らせながら歩いてくる。足元の何かに気づかずに。

ドガアアアーン！！

「！……！」

設置型のTNTを踏んだオートマトンはバランスを崩し、横に倒れる。そして数個の手榴弾がオートマトンに向かって投げられた。

まずは一体。さすが最新鋭の技術を駆使して作られた教習所、なんともないぜ。

爆風を上手くやり過ごした3人は、これからの作戦会議していた。ガトーは手元のAnd idをいじっている。

ガトー「オートマトンはあと数機いるようだ。連絡だけはついてよかった。情報はあるに越したことはない」



黒月「残りの弾薬は大切に使わないと…旧式のオートマトンでよかったですよ。でないと最新式のやつはグレネードすら効かないんでしょう?」

コウ「RPGでやつとこさダメージが伝わる程度だったか。どれにしろ早く増援が来てくれることを祈ろう」

ガトー「そうだな…あまりセ　ル化したくない(チートの意味で)。ドーピング・　ンソメ・　プも私の身体に負担がかかりすぎるからな」

黒月「持つてんすか?!DCS?!」

ガトーの携帯に連絡が入った。

ガトー「こちらスネ…もとい、ガトー。何だ?」

電話越しの声「こちらシャア・アズナブル。生きているようでよかった。いまヒロ・ユイとティエリア・アーデがハックしてシャッターを開ける作業に入っている。もう少し持ちこたえてくれ、開いたら私もすぐに向かう」

ガトー「了解した。任務を続行する」

黒月「いや、任務じゃねえし…」

コウ「いざとなったら僕がファイナル・エスプージョンで…」

黒月「あ、自爆だったらあなた一人をお願いしますね小生たちまだ死にたくないんで」

コウ「（え？何で僕だけこんな扱いなの？）」「シヨボン

ガトー「（シツ…来たようだぞ…二人は充電を頼む）」

コウ・黒月「了解！」シュリシュリシュリ

ガトー「こっちだ！！オートマトン！」

オートマトン「！！！！」

こちらに気づいたオートマトンがそれなりの全力疾走で銃を乱射しながらこちらに近づいてきた！！

黒月「充電完了！！ぶっ放せ、ガトーさん！！」

ガトー「喰らえ！！協力兵器！！レールガン！！」

凄まじい閃光。マッハ3以上のスピードで金属の飛翔体が標的の中心を打ち抜く。飛翔体を通った後には鉄くずがくずぶっていた。喫茶店のマスターの姿のガトーがレールガンを打つ姿は、はっきり言

ってシールドである

黒月「残念だが貴様らは地獄へ一方通行だア！！おとなしく尻尾巻いて元いた場所に帰りやがれえ！！！」

コウ「（もやし？セロリ？…どっちでもいいか）後何体だ、ガトー？」

ガトー「連絡によるとあと2、3体はいるようだ。弾薬も残り少ない、後はやり過ごそう。ほら、特殊加工済みスニーキングアイテム……ダンボールだ」

黒月「え？だいじょぶなの？」

コウ「賭けよう、ダンボールの強度に…」

黒月「賭けようがねえ！！」

ガトー「ダンボールをバカにするなよ？今まで数々の英雄がこのダンボールによって命を救われている。お前もダンボールを粗末にするようなことがあれば…」

黒月「オーケイ、黙って」

ガトー「……」 ショボン

## 不憫なシャア（前書き）

不条理です。シャアファンの方すみませんm（：i l m

## 不憫なシャア

？「待たせたな」

煙が晴れると、そこには紅い姿が、静かに佇んでいた

シャア「赤い彗星用・バトルスーツ…アイアン」

3人「シャアさんストロー…アップ!!」

著作権的な意味で色々ギリギリのような気がする。

シャア「私の友人で兵器産業を営んでいる社長がいてな、特別に譲ってもらった」

黒月「どう見てもト　さんですありがとうございます」

ガトー「中の人とはすごいものだな…」

コウ「お前が言うか」

シカトされぶち切れたオートマトンがまたしても銃を乱射してきた。だが、その銃弾はチタンとその他もろもろの合金の前にはじかれる。

シャア「甘いな…攻撃とは…こういうことだっ…！」

腕からミサイルを発射し、一瞬にしてオートマトンを一掃してしまった。後にはもう動かなくなった鉄くずが転がっているだけ。

シャア「しかしムレるな…暑いことこの上ない」

コウ「これが赤い彗星の実力…3倍とか最早関係ないけど…へっくし…！」

バリーーン！！

コウのくしゃみと共にシャアのバトルスーツは中に着ていた服ごと粉々に碎け散りました。後に残るは全裸のシャアのみ。

シャア「私が…何をしたというのだ…」

黒月「諸行無常だ…」

## 教習所講師定例ミーティング

アムロ「ファーストの主人公がやっと今になって登場だ。とりあえず張り切って司会を勤めさせてもら…」

ハマーン「大丈夫か、シャア？それより服くらい着たらどうだ」  
／／／／／

シャア「ああ、心配には及ばん。何も問題はない」

一同「問題だらけだーーーーー！！！！」ガビーン

アムロ「ウチから犯罪者を出すわけにはいかないのでカテジナさんと二ナさん、教育お願いします」

カテジナ「マジでトチ狂ってんのほんとに勘弁してお願いしますこのとおり」

それは美しい、流れるような動作での土下座でした。二ナさんはi p d（あれ？隠せてなくね？）で現実逃避してました。（というか作者が知らない）

カテジナ「周りがこんなだと…無駄に哀しくなりません？」

シャアさんが服を着たので再開

アムロ「んで、今回の事件についてだけど…」

ハロ「ボクトケイヤクシテ、MSパイロットニナツテヨ」

カテジナ「バカにするな！！それ位もうなってるよ！！年考えろ！  
あとえちいシーン」私と勘違いするな！誰がビッチだ！！」

ハロ「ダイジョウブ、ヘンシンシーンハアナタガハダカニハナラナイ」

カテジナ「？」

ハロ「カワリニシャアガ、ゼンラニナル」

バリーーーーン……！！

シャア「私が……一体……何をしたというのだ……？」（泣）

また中断

アムロ「話が進まない……もうヤダこのメンバー……」（泣）



## 不憫なシャア（後書き）

ガンダムシリーズの女性陣は男の裸体ぐらいで動揺しないような気がします。書けませんでした。が、ハマーン様は顔が真っ赤になって俯いてますww

空を切り裂く白いヘチマ（前書き）

あれ？何でコメディーなの？…まあいつか！！（良くねえ！！）

## 空を切り裂く白いヘチマ

慰安「大破したオートマトンを分析したところ、何らかの形で外部からの干渉を受けていたようだ。早い話がハッキングされてて起動した瞬間暴走状態に陥ったってことだな。おそらく充電中にだろう」

ジジイ「おかしい…訓練用とはいえ私達が開発したオートマトンが暴走など…よほどのハッキングの腕が無ければ無理だぞ…この教習所でそんなことが出来るものは一人もおらん…」

トレイズ「ハッキングが得意なヒイロ君や、ティエリア君などイノベイダーはどうなのだ？身内を疑うというのはエレガントとはいいがたいが、可能性が皆無とはいえない」

トレイズが手を組みながら重々しく言葉を紡ぐ。その可能性をミリアルドは否定した

ミリアルド「それは無いだろう。そのとき私はイノベイダー全員とロックオン兄弟とでラウン・ワンでボーリングをしていた。ヒイロは確かりリーナとどこかに出かけていたはずだ。デュオ君があとをつけていたので証言は取れる。第一彼らには理由が無い」

バルトフェルド「どれにしろ、何かが起こっているというのは間違いない。各々、注視して動かねばならないな……あらゆる戦争

が終わり、全てが完全平和になりかけていたというのに……このキナ臭い感じは何だ？」

サーシエス「闘いの匂いがすんぜえ……とびつきりデケエ戦火の匂いがよ……面白くなってきやがった……！」

マリダ「今日はいよいよ教習所のMSに乗って外で運転する訓練です」

黒月「ついに、といった感じですか……」

マリダ「教習所内での運転の腕が、黒月くんは上手でしかたね。ヤモリ君もがんばっているようですよ。あとあの変態も」

黒月「……………そうか。頑張ってるのか、あいつ」

最近レイナの姿を見ない。帰りの送迎オーライザー予約の欄に名前  
はあったので、来てはいるようだ。出会っても、なんだか険しい顔  
をしていて話しかけるような雰囲気ではなかったりするので、小生  
やヤモリも話しあぐねていたのだ。最初出会ったときのような無邪  
気（邪な気持ち全開の言葉遣いは覗く）で明るい笑顔の面影は、ど  
こにも無かった。

マリーダ「今日は教習所のクシャトリヤで外に出ます。私も助手席  
的なコックピットに乗るので、一応は大丈夫です」

黒月「おお、白ベースもなかなか悪くないな……」

長年あこがれたその機体が倉庫から姿を現したとき、小生のテンシ  
ョンは最高潮になった。白ベースの配色の教習用クシャトリヤ。そ  
の姿はどことなくあのハマーン様の愛機のキュベレイを連想させた。  
おっといかんいかん、何事も落ち着きが大切。3色覆面の先生も言  
っていた。明鏡止水がどうたらこうたら。まあとにかく落着けつて  
ことだ。

クシャトリヤはガンダムのように正面から射出するのはあまり得意  
ではないため、上へと飛び上がる形か、宇宙なら投下するといった

感じが主である。キュベレイなどもそれに類する。今回は飛び上がる形だ。

マリィダ「では先に乗り込んでください、私は後から乗り込みます」

黒月「了解しました、教官!!」

言ってみただけだ。上からたれてきた搭乗用のワイヤーをしっかりと足につける。上っていく途中、後ろの教習者ナンバーを裏返していたメカニックさんが親指を立てて健闘を祈ってくれた。小生もそれに答えて親指を立てる。後からマリィダさんも乗り込んできた。準備は万全である

クシャトリヤに備わる最大の特長とも言っている大型の4つのバインダーが開き、その異形をあらわにする。バインダーの陰からクシャトリヤの顔が見えたと同時に、その顔の中央のモノアイが妖しく

煌く。心臓が高鳴る。操縦桿を強く握り締め、呼吸を整える。

フェルト「出撃タイミングを、黒月さん、およびマリーダさんに譲渡します。検討をお祈りしています」

黒月「認識した。黒月、クシャトリヤ！―これより出撃する！―」

操縦桿を引き、4つのバインダーにそれぞれある8つのブーストに熱をこめる。教習所の上空へ、白い影が飛び上がっていった。

## 空を切り裂く白いヘチマ（後書き）

クシャトリヤ大好きです。マジで乗りたいです。実はこの想いからこの作品が出来ちゃったわけで… やつと本題に入りました〜 拍手う！！



## クシャトリヤ無双（前書き）

ブル遺伝子の優秀さは異常です。なのに不憫な設定があることを知って大分びつくりしました。ここではそんなブラックな設定はありません。ご安心を、皆健全に、平和に暮らしますよ？

## クシャトリヤ無双

まずは急上昇、停止からの状態維持。そしてゆっくりと降下。高度500メートルほどのところでマリィダさんの指示を待つ

マリィダ「では始めましょう。戦闘プログラム、起動」

周りにギラ・ドーガのホログラフィが展開される。その数およそ100ほどか。

マリィダ「100機のホログラフィです。まずは全滅させてください。終わったら次のステップに進みます」

黒月「しょっぱな100機で……認識しました。では、いざー!!」

首のチョーカーのスイッチを入れる。空間認識補助プログラムを起動し、7機のファンネルを展開。同時に袖の中のビームサーベルを抜刀する。

黒月「征くぞー!!」

まず一体に切りかかる。ビームガンを放ってきたので右肩のバイン

ダーのフィールドを発動、防御しながら突進。真つ二つに切り伏せる。から空きの後ろに別の機体がヒートホークを構えながら迫る。小生はあらかじめ展開しておいたファンネルに指令を出す。

背後の機体を撃て！

全方位からビームが打ち込まれ、背後を取ったはずのギラドーガは、全方位から滅多打ちにされ碎け散った。そうしている間に他の機体が一斉に襲い掛かってくる。4つ全てのバインダーのフィールドを起動し、防御しながら上空に舞い上がる。

黒月「よし、着いて来やがったな。喰らえ！！」

方向転換、胸の4門のビーム砲のエネルギーを充填し、ぶっ放す。一瞬にして塵芥と消えた雑魚キャラたち。爆音が響いたそのとき、小生は背後からまたしても機体が迫るのを感じた。

黒月「残念でした、さようなら」

バインダーに仕込まれた、胸のビーム砲と同じものを敵の方向に向

け、発射。それにしてもこのクシャトリヤ、死角がない。

マリィダ「多勢戦、まずはレベル1クリアです。お疲れ様でした」

黒月「あれでレベル1?!…マジですか…まあ簡単だったけど」

マリィダ「ナイトメアレベルになるとユニコーンガンダム・デストロイドモード100機を無双しなければなりませんよ?」

黒月「まさに、<sup>ナイトメア</sup>悪夢ですか…完全な無理ゲーでしょ、それ」

マリィダ「いまだにクリア者が出ませんからね。何でこんなもん創ったんだか。ちなみに創ったのはリボンズです。これでイオリアとか目じゃねえとかほざきながら創ってました。ボロボロにされて部屋の隅で泣きじゃくってましたね」

黒月「リボンズエ…まあいいや、ともかく次のステップですね」

マリーダ「はい、次は市内でのMS歩行訓練です」

黒月「了解！」

小生はファンネルをバインダーへ回収し、ゆっくりと操縦桿を下ろし、高度を下げ始めた。

地上に降りるとぽつぽつ雨が降り出していた。上空にいたときから気づいてはいたが。雨の日はゆっくり部屋でのんびりするのが一番なんだが、こういうのも、なんかいいなって思った。

マリーダ「ではナビゲートします。このままこの先の信号まで直進してください。その信号を左へ」

黒月「了解」

バインダーをたたみ、歩行するに適した状態まで持っていく。そのままゆっくりと歩を進める。初心者はまずは安全第一だ。ゆっくりでもいい、スピードを上げるのはずっと後でいいのだ。指定された信号まで行き、左に曲がる。クシャトリヤは大きいので、バインダーが引つかからないようにゆっくり小回りを利かせながら動かす。

黒月「うーん…もうチョイススピード緩めたほうが良かったか？」

マリィダ「そうですね、そして比較的大型のMSなので左回りの際の若干の右寄せが足りていませんでしたよ？」

黒月「ふむう…少し環境が違つとめちやくちや難しくなるなあ…」

マリィダ「教習所は基本的に障害物が少ないですからね。一般道ではそうは行かないでしょうね。大丈夫です、すぐ慣れますよ」

ニコリと微笑んでくれました。

黒月「もう死んでもいいです小生」

マリィダ「早まらないで!!」

割と本気で止めに来てくれました。あわててる姿もめちゃくちゃいいですハイ。もう小生1世紀ぐらい生きていけるような気がしました

## クシャトリヤ無双（後書き）

アニメ見たことないのに何やってんだこいつとか言わないで作者のグラスハートが傷ついちゃいますから…まあ、ライフル銃でも傷一つ付かない防弾ガラスですけどね…!!

……言ってみただけです



僕らの明日の光の先の瞳の奥の大空の下の人の心の光（前書き）

え？タイトルが長い？記録更新目指してますから！！w w

## 僕らの明日の光の先の瞳の奥の大空の下の人の心の光

マリィダ「と、とにかく！この先の空き地で一旦休憩しましょう。バックで駐MSしてください」

黒月「了解。…ん？」

指定の空き地に入り、バックで駐MS場に停めようとしたが、コックピットのバックガイドモニターに何かが映った。

黒月「？なんだあれ？」

マリィダ「なにかありますね…何でしょう」

駐MS止めの石に何かが座っている。モニターを拡大するとそれは子どもだった。全身ずぶ濡れで俯いている。危うく轢きかけた。早く気づけてマジでよかった。

黒月「……とりあえず止めましょう。バインダーを傘代わりにすりゃ雨はしのげるだろ」

マリィダ「初めてでしょうね、主にビームを防ぐためにあるバイン

ダーを傘代わりにした人は」

とりあえず隣の駐MSスペースに止め、バインダーを隣に伸ばし、  
子どもの上に広げて雨を防ぐ。

黒月「すみませんがちよいと寄り道します」

マリィダ「やれやれ、意外と不良なんですネ」

黒月「ほっとけ」

そう言いながらもにこやかな表情で小生を送り出すマリィダさん。  
正直、たまりません

足に搭乗用ワイヤーをつけ、下を確かめ、左右確認。そしてゆっくりとしたスピードで降りていく。途中横向きに降ってきた雨にびしょぬれになる。カッパ着とけば良かった…

黒月「どうしたんだ？その君」

出来るだけ柔らかい表情で接する。小さい子に接するのは比較的得意だ。え？ロリコン？めるぞワレ！！

少女「…だれ？」

怯えた表情でこちらを見てくる少女。腕の中にダンボールを抱えている。

ガトー「ダンボールだと？！」

黒月「？！……一瞬ガトーさんが居た様な気がしたが…気のせいだよな？…大分冷えてるな、タオルとかあればいいんだが…」

マリーダ「これを」

いつの間にやら下りてきていたマリーダがタオルを差し出す。傘持ってんじゃない貸してくださいチクシヨウ

黒月「おお！なんとご都合主義な展開なんだ！！」

マリーダ「うるさいですよ、そこ。これを渡してください」

ぐいとタオルを押し付けてくるマリーダさん。

黒月「？マリーダさんが渡せばいいんじゃない？」

マリーダ「こういうことは苦手なのです。お願いしますね」

黒月「（プルツのコミュ障がうつったか？）まあいいや、どうぞお譲ちゃん」

少女「…ありがとう…」

受け取ったタオルを自分ではなく、ダンボールの中に突っ込む少女。

黒月「捨て犬か？」

ダンボールの中には泥と雨で汚れた子犬が2匹。寒そうに二匹とも寄り添っている。柴犬だろうか、黒っぽい1匹と白っぽい1匹である

少女「うん…おうちではかっちゃいけないってパパとママがいうの…」

黒月「返して来いと言われたがそうできずに、途方に暮れてここにいたってわけか。優しい子なんだな」

頭を撫でながら慰める。この子の優しさがずっと続いてくれますように。ふと、レイナの姿が目に見えた。ああなってほしくない。

マリダ「とりあえずここに居ては風邪を引いてしまいます。教習所に一旦戻しましょう」

黒月「御意。お譲ちゃん、一緒に来てくれるかい？」

少女「……」

黒月「大丈夫、お兄さんとお姉さんが何とかしてあげるから」

マリーダ「下手すれば誘拐、もしくは未成年搾取ですしね」

黒月「そこ、うるさい。小生はロリコンではないと何度言ったらわかるんだー!!」

マリーダ「じゃあ…ペドフィリア？」

黒月「ロリコンとほとんど何もかわらねえじゃねえかー!!誰が年端もいかない少女しか愛せないだこらあ!!」

ちなみにロリコンの逆はショタコンと言われているが、ショタコンとは年端も行かない少年を愛してしまう性癖のことで、しょうたろうコンプレックスの略だ。

またひとつ、トリビアが生まれたな…」シミジミ

マリーダ「この子の耳塞いどいてよかったですよ」

少女「？」

黒月「じゃあマリダさん、あとはたのんます」

マリダ「はい、ではシャワーが終わったら食事処・ギムに行きま  
すのでそこで待機しててください」

少女「あとでねおにいちゃん」

黒月「ああ。あとでな」

シャア「さて、私も出るとしようか……」

黒月「ただしキャスバルてめーはダメだ！！ただでさえそっちの疑  
惑があるってんのに……」

シャア「ええいつ！！」 or z



ギム「雨が降ると小生でも気分が滅入る。いつもあんなハイテンションでは身と声帯が持たん」カチカチ

テイエリア「罠を設置した。こちらに誘い込んでくれ」カチカチ

刹那「了解。強走薬飲んでおくか」カチカチ

ギム「よおおし！！よくやった！！後は小生がチャージ3を…喰らいやがれえええ！！！」

二人「（テンション高いじゃん…）」

ガラガラ…と店の引き戸を開ける。中途半端に古風なんだよなあ、この教習所。

黒月「お邪魔しまーす」

ギム「おおお客様か。もう少し待っていてくれ、こいつ討伐したら注文聞くから」

黒月「お、何やってんですか？…後で小生も混ぜてくださいよ、丁度詰まっただとこなんです」

刹那「問題ない。…今だ！全員攻撃開始！！」

ギム「喰らえ！！」

ティエリア「えい」

ギム「おいティエリアア！見方がいるのに散弾撃つんじゃない！！溜められねえだろうがぁ！！」

ティエリア「わかったではこれでどうだ」

刹那「拡散弾かつ？！止めるティエリア、拡散弾は本当にシャレにならな…終わった…」

ギム「最後ティエリアに吹っ飛ばされて終わった…までティエリア、剥ぎ取りくらいはさせてくれ！…おお！！丁度ほしかったものが！」

刹那「不条理だ…」ズーン

黒月「剥ぎ取れなかったんすねせっさん…あ、もうちょいしたら連れが来るんでそのときに注文します」

ギム「了解したあ！さて。貴様の名は何だ？そっいえば聞いていなかったな」

黒月「黒月です。その節はお世話になりました。と、アバターカード送りますね」

刹那「受信した。…なかなかおもしろいコメントだな」

黒月「せっさんまんまじゃないすか…」

ここにガン免狩人同盟が結ばれたww

久々出てきたイモリ…もとい、ヤモリ（前書き）

いやあ、もう何がなんだか（笑）

とりあえず真面目臭くなってきましたどうしてこうなった…

久々出てきたイモリ…もとい、ヤモリ

マリーダ「お待たせしました」

ヤモリ「久々の出番キターー！！」

少女「……」

黒月「ああ、こいつはこういう症状なんだほつといてやれ。大丈夫か？」

少女「うん！」

走り寄ってきて来たので頭を撫でてやる。

黒月「そっぴや犬はどうした？」

マリーダ「一緒にシャワー浴びてきれいにした後、扉の前の傘たてにつないでおきました。飲食店に動物を入れるわけにもいきませんからね」

ギム「よく分かんがきれいにしたというなら入れてもいいぞ！ただしあまり暴れさせないようにな！ホットミルクを用意してくる！」

黒月「ギムさんマジ御大将！！」

ヤモリ「ヤモリ、狙い打つぜえ！！」カチカチ

刹那「だから人が切つてるところに散弾を撃たないでくれ！！」カチカチ

ティエリア「目標ごと殲滅する！！」カチカチ

刹那「何をやってるお前ら！！撃てえーーーー！！俺じゃなくてこいつを打てえーーーー！！」ビエーン！！

ギャーギャー！！

少女「楽しいとこだね！」

マリーダ「いつもこんなもんですよ、ここは。いいところでもあり悪いところでもあります」

速報の音がテレビから流れ出した。テレビのニュースキャスターが深刻そうな面持ちで情報を視聴者に伝える。

カイ「たった今入ってきたニュースです。ユーラシア連邦の宇宙要塞、アルテミスとの通信が途絶えたとの情報が入ってきました。現在ユーラシア連邦が情報の収集に当たっています…」

ギム「不吉なニュースだな…」

ギムが皿に入れたホットミルクを足元の犬にやりながらいう。子犬たちは夢中になってそのミルクをなめていた。その様子がほほえましいのか、ギムは優しい目で子犬を見ながら頭を撫でてやっている。丸くなったなあ、この人。

マリーダ「そういえば最近、アルテミスの傘の完全に修復が完了し

たというニュースも見たことがあります」

ヤモリ「なんかパワーアップして常時展開し続けることが可能になったんだっけか？」

黒月「なんつーチートだよそれ……」

少女「…………お父さん……」

なにやら不安げな表情でテレビを見つめる少女。

黒月「お父さんが働いているのか？」

少女「うん…今日はあそこにメンテナンスにいくって言ってた……」

黒月「大丈夫。きっと帰ってくるさ」ナデナデ

窓の外に降りしきる雨が、みんなの不安を駆り立てた。



？「存外に簡単だったな。これで計画の心臓部は入手した。次のプランにうつろうか」

？「くだらない。帰って寝る」

？「ふ、まったく…誰に似たのだから…フフフ…」

あたり一面に散らばる肉片や瓦礫を避けながらその人物は自分の寢床に帰る。腐ったドブ沼のような目は、漆黒の狂気に染まっていた。

少女の母が迎えにきた。ひたすらに頭を下げ続けている。誘拐犯といわれなくてよかった。

少女母「うちの子がお世話になり、本当にすみませんでした」

マリーダ「いいですよ、こちらも勝手にやったことですので」

ヤモリ「ぐふえふえ、お譲ちゃん、お兄さんと一緒に遊ばない？ぐふえふえ」

少女「いや…こないで…」

黒月「下がってろ…ついに穴があれば何でもよくなったかヤモリ！やらせはしねえ！やらせはしねえんだよお！」

黒月のハリセンサーベルとヤモリのハリセンホークが激しくぶつかり合い、火花を散らす！！最早常人には見えない速さで切りあう。一旦距離をとる二人

黒月「残念だ、今のお前では小生を倒せはしない」

ヤモリ「なに？！」

黒月「情熱 思想 理念 頭脳 気品 優雅さ 勤勉さ！！そして何よりも！！」

速さが足りない！」

激しいラッシュの後、強力なハリセンによるツッコミがヤモリの脳天を直撃し、ヤモリは意識の海に溺れていった…

ヤモリ「ガハッ……バカな…私の攻撃が……なぜ……？あ、俺が遅い  
せいか、なるほど。ゲブバラチヨォー！」ドサア…

黒月「あつけないものだ……これが、勝利？いや、違うな…」シミ  
シミ

虚無感に満ち溢れた表情でハリセンサーベルを血払いし、納刀する  
黒月。

ティエリア「ハイカーツト！いい感じだ、この調子でラストシーン  
行くよー」

刹那「ういーっす」

マリーダ「何やってんですか…」

ギム「さあ来い黒月！！私は一回刺されただけで死ぬぞぉ！！」

黒月「まそつぷ！！」ブスウ！！

ギム「ごはぁ！！ザ・おばちゃんパーマと呼ばれたこの私がぁ！！ばかなぁーーーー！！」

マリーダ「いい加減にしてください御大将まで！」

少女母「付いていけそうにないわ…」

むしろ付いていけるほうが凄いのである

ちょっといい話っぽかったような気がする

黒月「んで、この犬どうしましょうか…」

少女母「ウチはお父さんが大の犬嫌いであ…とてもとても飼えそうにないんです」

少女「どうしよう…」

ギム「ふむ、少し理事長と話してくる」

マリィダ「何をするつもりですか？」

ギム「確か理事長が犬好きだったはずだ。ここで飼えるかどうか掛け合ってみるか」

一同「ギムさんマジ御大将!!」

んで。

黒月「教習所の玄関口でこいつらを飼うことになりました。最終的にギムさんその他もろもろで奇襲をかけて脅したってのが事実だったり」

刹那「名前はとうする？」

ヤモリ「パ ティとストツ ングでどうだ？」

ティエリア「目標を丸焼きにする！！」

ヤモリ「ぎゃああああ上手に焼かれちゃううう！！！！！！嗚呼！！火が通ってく！！今まさに皮膚が焼けてるうう！！」ジュウウー

黒月「良い子は見たり聞いたりしちゃいけませんよ」

少女「？」

黒月「そうだ、君が考えてくれるかな？」

ティエリア「先ほど確かめたが、両方メスのようだ」

少女「うーん……白い子はユリ、黒い子はランでどうかな？」

刹那「いいセンスだ」

少女母「ともかくご迷惑をおかけしました。またこちらに夫と共に  
お礼に来させてもらいます。さて、帰ろっか？」

少女「ねえお母さん！たまにここ来てこの子達の面倒見たい！！」

少女母「そうねえ…家もたまたま近いし…一人で来れるならいいけ  
ど…」

少女「来れる！ねえお母さん、いいでしょ？」

刹那「迷子が心配なら俺が送ろっか？」

少女母「いえ、そこまでしてもらうわけには…」

刹那「俺もこの近くに住んでいるんだ。行き返りなら問題ない。明日の朝10時頃、児童公園で待っているといい」

少女母「……ではお願いします。娘が本当に迷惑をかけました。では私達はこれで」

少女「ばいばーい！」

手を引れて教習所を出て行く少女。いつの間にか、雨はすっかりあがり、晴天の空が広がっていた。

黒月「いい話だったな…ぶえつくしー！」

マリィダ「風でも引きましたか？というかちゃんと拭いたんですか？」

黒月「とりあえずシャワールーム借りてきます…ひえつくしー！」

ヤモリ「おっさんみたいなクシャミ…」



黒月「おい焦げ臭いぞ、ヤモリ。どうせなら使える備長炭あたりになればよかったのに」

ヤモリ「黒月マジ外道」

オチが弱いような気がするが、気にしないでくれると嬉しい

捨て犬編 終わり

ちょっといい話っぽかったような気がする（後書き）

さて次のガン免は？

ついに完成した黒月専用MS！！ジャンク屋のあの人やら色々登場するかも？！そしてヤモリにも専用のMSが？！黒月の友人のリア充っぷりに黒月その他マジ切れ？！

次回を待っててくれると嬉しいですハイ

自分専用とかロマンを感じますよね…え？そうでもない？（前書き）

オリジナルMSが出来ました。機会があれば載せるかも…ww

自分専用とかロマンを感じますよね…え？そうでもない？

黒月「今日は教習所は休みだ。最早教習所とか関係ないとか今更な  
んでほつとももらつとしてだ。今日は前々から作ってもらつてた  
小生専用MSを見に行きたいと思う。というわけで小生はここ、  
ジュードーと！ロウの！ジャンク屋同盟（株）」に来たわけだ」

…というわけだ。

ヤモリ「よう黒月！相変わらずイカ臭いな！」

黒月「してねえよ！！なにも！つかなんでお前もここにいるの？」

ヤモリ「分かってんだろ？わざわざここに女遊びしに来るやつ  
なんかいないだろ？中古MSないか見に来たんだよ」

下らない話をしていると入り口から誰かが出てきた。

ロウ「いらっしゃーい！本日はどのようなご用件でございましょう  
か？！」

黒月「テンション高え…前にジャンクパーツでMS製作をお願いしたんですが」

ヤモリ「俺は中古MS見に来ました」

ジュード「じゃあそっちのリックディアス君は俺について来て！こっちに丁度入荷したばっかのやつがあるんだよ」

ヤモリ「誰がリックディアスだ！！どっちかっていうとドムだよ俺は！」

黒月「それでいいのかヤモリ？」

名簿のようなものを見ながらロウ・ギールが小生の名前を確認している。

ロウ「君は黒月君だね、俺について来てくれ！」

黒月「おお…！」

そこには小生の注文したとおりのMSがあった。

ロウ「全長17・5メートル、重量91t、

主な武装

65mm対空バルカン（クシナダ）、×2

ビームサーベル（マガツタチ）×4

50mmビーム・ガトリング（ソルハバキ）

ファンネル×6など。

オプションでサイドの大型バインダーにはエフィールドと80mm  
高エネルギー砲（ウロヴォロス）、ソードビット×3つずつ。  
どうだい？」

黒月「すごく…ゲテモン臭いです…」

ロウ「まあ設計の時点で気づくべきだったんだろうけどねwwあと  
希望の隠し腕とか近距離特化モードと遠距離特化モードとの切り替  
えも出来るようにしといたよ。でも大丈夫？ものすごく酔いそうな  
機体だけど」

黒月「乗り物酔いには強いんですよ、小生。小さいころ母がセイバーガンダムに乗ってまして…乗るたびに限界速度に近い速度出すモンですから…慣れてしまっただけ」

ロウ「苦勞してるんだね、君も…ところで名前はとうするんだい？」

黒月「そうですね…一応ガンダムである基準（アンテナと目）は満たしてるんで…ガンダム・アルドラでどうでしょうか…」

ロウ「いいんじゃないかな？じゃあ登録手続きはこっちでやっておくから、君は早く免許を取る努力を怠らないようにね！」

そのころヤモリは…

ジュード「シャアザクは基本的に人気だからね、相場はいつもこんなもんだよ」

ヤモリ「なんじゃこりゃ!!…家買えるってレベルじゃねーぞ…」

ジュード「どうする？基本的にシャアザクはこの値段から動かないよ？買ったとしても現品到着まで年単位かかるし、今じゃ偽物とかも出回っているみたいだしね…この前ジム注文した人がやたらでかい妙なMSが来たって騒いでたし。もちろんウチのことじゃないけど」

ヤモリ「それなんてイ…なんでもないですハイ。どうしよう…もうザクでいいかなあ…」

ジュード「さっきの知り合いみたいに自分専用の作らないの？今ならキャンペーン中で値段もお得、設計見積もりも無料なんだけど」

ヤモリ「ほう…見せてもらおうか、ジャンク屋の技術力というものを!」

ジュード「まとめてみたけどこんなもんな」



ヤモリ専用MS

形式番号ERO-2

ファルコン  
F・ヴェンザ

全長19・7m 体重 105t

主な武装

高エネルギービームライフル

60mm近接用バルカン×2

350mm径連装ミサイルポッド(マンモス)×2

300mm対戦艦用砲×2  
イッマデタッテモ・ハルコンネン

EROキャノン(Electric Long Overキャノン)  
(超長距離電磁砲)

ビームトマホーク×2

ヤモリ専用に設計されたMS。ヤモリ好みに遠距離射撃特化に仕上げており、近接武器はほとんど付いていない。動きがとても遅いが、その代わり圧倒的な火力と射程距離を誇り、10キロ離れた場所から打ち込まれるEROKャノンは敵にとって脅威となる。近接格闘時は遠距離武器をマウントしているアーマーを一部パージしなければ、ほとんど動けない。

ジュードー「どうかな？」

ヤモリ「おお……まさに俺そのものではないか……なんかテンションあがってきた！ぎやらくしいい……！！！！」イヤッホー！！

ジュードー「もしもし、アナハイム精神病院ですか？実は今日の前でお客様が発狂しまして……」

ギャラクシー（galaxy）意味：銀河

自分専用とかロマンを感じますよね…え？そつでもない？（後書き）

もっなんかグダグダです本当にありがとうございましたorz

## 仮免許取得編 前編（前書き）

しまった仮免許取得の流れ忘れてたってわけ投稿するぜ！！順番  
かどうでもいい！

……すみません睨まないで

## 仮免許取得編 前編

黒月「まあいい、今日はちょっと過去をさかのぼって（作者が忘れてた）仮免許取得したときのことを語ろうと思う」

ヤモリ「ガン免、はーじまーるよー！ー！ー！」

O P o n l y m y M S

ヤモリ「カラオケ行く度それ歌ってるよな、黒月は」

黒月「小生個人としては神曲だと思っている。小生の携帯の音楽フォルダにはこの類が5種類くらい入ってる。合唱バージョンからカバーバージョンまで」

ヤモリ「もはや中毒患者だな」

セルゲイ「今日仮免許取得テストに出るもの、11時に801号室まで出席するように。各自、しっかり準備しておけよ」

ヤモリ「あの渋い感じがカッコいいよな、セルゲイさん」

黒月「最近は娘に彼氏が出来たとかいう噂を聞いて悩んでるそうだ。昨日休憩室の隣の喫煙室で遠い目をしながら「もうそんな年頃か……」って紫煙燻らせながらつぶやいてた」

ヤモリ「ええオヤジさんやマジで」

黒月「その娘さんと彼氏がなんか画策してるって噂も聞いたな。そういえばもうすぐ父の日か……小生に父親はいないが」

ヤモリ「途中いい話だったのに最後リアルな爆弾さらっと投下しないの黒月！」

カデジナ「トチ狂って飲み友達にでもなりに来たのかい？ キヤはっ

スメラギ「少なくとも私達にトチ狂うほどの時間は残されてはいないわよカテジナさん……そろそろ本気ださないと30:40:負け組み一歩手前、私達は既に崖っぷちなのよ!!」「ズバーン!!」

カテジナ「いやあああやめてえええええ！！」ジタバタ

>>>>>>>スメラギ「既婚者、またはリア充>>>>>>>越えられない壁>

カテジナ「……………」ボーゼン

黒月「カテジナさんの口からなんかでてるな……ユーレイみたいなのが」

ヤモリ「小説の中の自分>>>>>>越えられない壁>>>>

>>>>現実の自分」

黒月・ヤモリ「あべぶしゃらげちよおおおお!!!!」「ゴッブア!!!

セルゲイ「ではそろそろ時間だ…って辺りが血の海に!!」「ガビーン!

## 筆記試験

セルゲイ「これから諸注意をする。各自よく聞いておくように」

めんどくさいのと眠いので諸注意終了

ギム「腹が減っては戦はできぬう!差し入れのヤキソバパンとコロツケパンだ!!」



刹那「飲み物も同時に渡す。受け取ってくれ」

一同「ギムさんマジry（以下略）」

テスト開始

黒月「（MSに搭乗する際、周りを見回して注意し、しっかりと足に搭乗ワイヤーを付け、搭乗しなければならない……考えるまでもなく丸だな）」

ヤモリ「（MSは日常的にオイル点検など点検をするのが好ましい……本音と建前か…丸つと）」

セルゲイ「筆記試験終了だ。各自テスト用紙を通路側の人に回し、待機するように。食べるなら今のうちにパンを食べておけ」

黒月「うまつま」モッキュモッキュ

ヤモリ「今日も平和だパンがうめえwww」モツシャモツシャ

セルゲイ「（私の苦手な紅しょうがこんもり山を作るほどヤキソバパンを侵食している……ヤキソバの部分が見えん…おのれギム・ギンガナム！）」（泣）

ごーかくはっぴょー！

黒月「とりあえず筆記は合格か。割と簡単だったな」

ヤモリ「途中おかしい質問なかったか？赤い機体は正義である、とか…まあ丸にしたけど」

黒月「赤けりや何でもいいってわけではないだろう…百式まで赤色にする気か？」

アレハンドロ「落ちた…リボンズウウウー！！！」ビエー

ーン!!

一同「うるせーな…ひピーッすか?」

リボンス「恥ずかしいってレベルじゃねーぞ…ちなみにこのバカはMA無免許で捕まって免許剥奪されたので再試験に来たってわけ。金ジムはMS免許とMA免許が両方ないと運転できないって判断されたからね。説明臭いなあ…」

仮免許取得編 中編（前書き）

後編にしようかと想ったけどもういいや！w w

今回はちょっと役に立つかも？

## 仮免許取得編 中編

黒月「次は実地試験か。皆乗るMSは共通なんだっけか」

ヤモリ「そうだ、たしか教習用ジエガンだったな。俺としてはギラドーガのほうが望ましかったのだが…やってみる価値ありますぜ的な意味で。アクシズ落下はひやひやさせられたなあ…」

ハマーン「なるほど、久々アクシズの家に帰ろうかと思ったら、アクシズが真つ二つになってたかと思っただけならそれのせいだったか。逆シャア見るまで知らなかったよハハハ…ちよつとシャアとつちめてくる」ジャキツ

黒月「ハマーンさん落着いて！」ハガイジメ

ハマーン「あとでリゾート地に改造してプライベートビーチ作ろうと思っただけにあのクサレロリコンめ！！見敵必殺に値する！！キユベレイを出せ！！問答無用で粉にしてやる！！もうチャンスなんかやらん！！シャア一人に対して従僕2万人でつぶしてやる！！」ギヤピー！

ヤモリ「そくだよ落ち着いて浜さん！！つかなんて企みだよオイ俺も連れてってください！！青い空！白い雲！そして水着の天使たち！！」

イメージ画像・青い空、白い雲、そしてMrブシドー&ギンガナム  
&シャギアによるセクシー水着+セクシーマツチョポーズ

ヤモリ「なんつーイメージ画像だよおい!!完全にガチムチホモ向  
けじゃねえか!!そうじゃなくて女性キャラを出せよ!!」

ハマーン「誰がダツシュ海岸だコラアア!!」ナギハラエビーム  
ドーン

ヤモリ「ぶぎやあああああああ?!!?!!?!!」

黒月「すげー…世界が燃えちまうわけだぜ…」クサツテヤガル…ハ  
ヤスギタンダ…

黒月「仮免許試験は班ごとに分けられて一台の4人乗りジェガンを乗り回していく。それぞれ違うチェックポイントで交代しつつ試験を受けるってわけだ。小生は3班、助手席で採点するのは頼れる兄貴、ラッセさんです」

ラッセ「がんばれよ、これで落ちたら後が辛いからな。合格すれば記念に仮免許証に貼るキメ台詞シールがもらえるぞ」

黒月「ウス！正直キメ台詞とかどうでもいいけどがんばるっす！」

カタギリ「同意せざるを得ないな…」

黒月「つかなんでカタギリさんまで乗ってんですか？技術開発担当じゃありませんでしたっけ？」

カタギリ「いやね、作ってるうち乗ってみたくなっちゃったってだけなんだよね。乗り物酔いがひどいんでそのときはよろしく」

黒月「今までの行数返しやがれそして吐いたら殺す」

ラッセ「そろそろ時間だ。各自シートベルト締める。カタギリは酔い止めを飲め」

黒月・カタギリ「了解」

まずはスタート地点から数十キロを制限速度を守って速度は40キロ、ゆっくりめに走行。制限速度50キロのところではブーストを使いつつ加速、スピードが出るのでレーダーをよく見ながら走行する。

信号では左寄せと右寄せ、左右の確認、後ろから後続のバイクが来ないかの振り向き確認を1秒足らずでこなす。ぶっちゃけレーダーがあるんでなくてもいいような気がするのだが、たまにアホみたいにスピード上げるバイク野郎がいるので注意しておく。

カタギリ「おえっぶ…うつぶ…」

黒月「チェックポイントには早いんですけど休憩しませんか？（汚物处理的な意味で）」



ラッセ「その駐M S場に停めよう。路側帯に入るときは？」

黒月「一旦停止、通行者の確認ですよね」

カタギリ「すまな… ヴォロロロロロ…」ゲロゲロゲー…

黒月・ラッセ「やっちまったー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

不幸だ……

仮免許編 後編（前書き）

ちょーしにのりまくりです。カタギリさん好きな人は見ないほうが…

## 仮免許編 後編

いやあ、大変でしたww

カタギリさんが吐いたり。

カタギリさんがあっちこっちにぶつけそうになってラッセさんが緊急停止ブレーキを何度も踏んだり。

カタギリさんが吐いたり。

カタギリさんが路側帯を歩いてる女の子に目を取られている隙に前から迫ってきたサイコガンダムMA形態につぶされそうになったり。

カタギリさんが吐いたり。

その臭いを追い出そうと窓開けたら窓から入ってきたトリイが助手席にいたラッセさんの顔面にぶち当たってなんかかっこいい感じのキズが出来たり。

カタギリさんが吐いたり。

カタギリ「僕は…」ショボーーーーン

黒月・ラッセ「（悲惨すぎてかける言葉が見つからない…）」

カタギリ「私に優しいのは君だけだ、」ぬ」のハンカチよ…」シクシク

黒月・ラッセ「（そのハンカチのせいで悲しさが伝わらない…あとキモい）」

機内はカタギリさんが責任を持って掃除いたしました。仮免許は落ちたそうです。でっすよね〜wwww

というわけで最後はラッセさんの運転で教習所に帰ってきました。

黒月「教習所よ！！小生は帰ってきたあ！！」ファ~~~~ア

ヤモリ「おう黒月！どうだった？」

黒月「可もなく不可もなくってところか。お前は？」

ヤモリ「俺のセルライトアーマーのせいで搭乗口につつかえたり。

搭乗用ワイヤーが俺の重量に耐えかねて途中止まったり。

俺のせいで機内温度が数度上昇し、ほかの搭乗者が白い目でこちらを見てきたときは軽く死にたくなっただがそれ以外は問題ない」

黒月「oh……」

コイツも不憫である

マリーダ「お疲れ様でした。受かっているといいですね」

プルツ「まあ…よくがんばったよな…よかったと思う…か、勘違いす…」（以下テンプレ）

つくづく思う。それにしてもこの遺伝子、優秀だと。プル姉妹3人でハートキャッチプルキュア…いや、なんでもない

リボンス「そうだね、それもいいね」ハアハア

剎那「トランザム！！ライザアアアあー！！！！！！」オミヤゲヤトカデヨクウツテルボクトウデズドーン！！！！

リボンス「ヘナツプ！オグツプ！マジ調子のはずんませんでした  
ブヘアアアー！！」モルスア！

黒月「（目が本気ですイノベ化してます 怖いです…あれ？一句出来ちゃった…）」

リボンス「いやあ、ロクな目にありませんww悪役って大変ですo  
rz」リボンスションボリ

刹那「これきりにしろ。この子達をそういつ目で見るな、あとパン  
かってこい、あとガガで突撃してこい」

リボンス「……………どこに？」

ちなみに仮免許は合格してました。カタギリさん除いて

仮免許編 終わり

## 仮免許編 後編（後書き）

さて次はどうしましょうか…ガン免は基本的にその場のノリで書いてるので後から見ても

orz

なんてことが日常茶飯事ですww

レイナがぜんぜん出てこないのがんばってみますww



## 本格的シリアスっぽい空気（前書き）

さて、そろそろこの物語を終焉に導く準備をしなければなるまい。

見届ける必要があるだろう、戦う者達の、この物語を！！（相も変わらずボケ倒すけどねww）

## 本格的シリアスっぽい空気

黒月母「今日は教習所ないん？」

黒月「昼からの予定だ」

黒月母「りょうかい」

黒月「さて、飯は食ったしなにしようかな」

自室に引きこもり、適当にパソコンを開き、検索サイトのAHUO  
ON!!のトップページを開く。今日のニュースはっと…

## トピックス

伝説のニュータイプストレートパーマに?!天パーの苦悩

赤い彗星専用ペン今日発売、使用者は「冗談ではない」

仮面の愛用者が語る、仮面の良し悪し「覆面は仮面ではない」

アルテミスついに制御不能に?!

黒月「一番下だけものごつついエグい内容だな…」カチカチ

## 記事

昨日アルテミスを保有するユーラシア連邦は、一昨日通信が途絶えたままのアルテミスがついに制御不能になったことを明かした。ユーラシア連邦のトップは「このまま地球の重力に引かれて地球に落下するかもしれない。最悪の計算だとコロニーもその軌道に入っている可能性もある。最悪のことが訪れる前に何とか対処したい」と疲れを滲ませながら語った。

なお、アルテミスは通信途絶直前にメンテナンスのため、地球の近くに移動させていた。

黒月「なんだかんだで面倒になってきてんなあ…政府のお偉方はいつまで現実逃避してやがったんだか」

呑気に考えてはいるが一応死活問題である。もしもそのときが来るとてんなら…あいつと仲直りしておきたいな…そう思っているうちに登校時間が来た。さて、今日も元気に学びに行きますか！！

……………こういうときこそ空元気だ…

送迎オーライザーに乗り込む。そこには久しぶりに見る姿があった。

あいつの特徴である赤茶けた色のセミロングの髪。容姿端麗。ボンキュッボン。……最後のは聞かなかったことにしてくれ…

レイナ「久しぶり、黒月くん」

疲れた表情でレイナが座っていた。なんか目の下にクマができてい  
る。何かあったのだろうか

黒月「お前が俺たちを避けてるような感じがあったと思うがな。と  
もあれ、久しぶりだな」

レイナ「ホントに。なんだかんだで余裕なかったのよ、仮免許一回  
落ちたしね」

黒月「一発合格」ドヤッ

レイナ「すごい！抱いて！」

黒月「うん、今の一言でお前がお前だって確信が持てたわ」

黒月「何で今まで小生たちを避けていたんだ？」

レイナ「……………色々あったのよ」

黒月「そのいろいろを話してくれたら剥ぐしてやるけど」

レイナ「カタカナだったら大歓迎、衣服的な意味なら大好物よ、大丈夫、私基本乾き知らずだから」キリッ

黒月「……………」

レイナ「今日で教習所最後なんだよ」

黒月「ほう？」

なぜだろう。空気が重い。少し前ならあれだけ話せたのに。ヤモリがいたのもあるのだろうか。そして肌にまとわりつくこのザラツとした感触。吐き気がする。

レイナ「お別れになるね、だから今のうちに喋るところと思って！  
そっぴや黒月君さ…」

黒月「…あ、ああ…」

いよいよえらいことになった！！

黒月「登校風景すっ飛ばしてきたけどレイナはほんとに変わりましたね」

レイナ「褒めても私しか出ないわよ？フヒえひえヒエヒエ…」ハアハア

今日の授業はファンネル講座からである

ブルツ「ファンネル操作の脳量子波は何ヘルツだ？黒月」

黒月「およそ37564ヘルツ。ニュータイプでない一般人はこの脳量子波は出せないのになにか補助装置を体につける必要性があります」



プル「うわぁゝすごいすごい!...でも問題は操作の腕だね。最初よりはマシだけど私たちを100とすると...2、いやゼロだねww」

黒月「教育的指導!」シャイニングツッコミハリセン!!

プル「...」ヒリヒリ

プルツ「それなんてギム...」

黒月「おっと言わせねえ棒付キャンデー攻撃!」ガボツ

プルツ「むぐう?!...ペロペロ...バキッ...ボリボリ」

黒月・プル「食いちぎった?!」

ドカーーーン!.....!

黒月「何の脈絡もなしに大爆発が起こった?!?!」

直後停電。この講義室には窓がなく、日の光は入らない。すなわち、真っ暗闇である

プル「うわー！！てーへんだ停電だてーへんだ停電だー！！  
うわーあ暗いよ狭いようえっへっへっへー！！」プルは混乱している！！

プルツ「ななななななあ…とととととりあえずおちつつつ  
つ…いやあ?!なんか私に触った?!助けておにいちやあああ  
ん!?!おばけええ…」プルツは泣き叫んでいる!

黒月「まああつゝくらであかりもないゝゝ　ヴオオオオオー  
!?!」黒月は歌いだした?!

ガコン…ヴン…チカチカ…

黒月「付いたな、電気」

プルツー「こここここわくなんかなかったさそうさお化けなんてないさお化けなんてうそさああああああ……」（；；；）  
ビクビク

プル「黒月君、さっきのプルツーの鳴き声録音したんだけどあげるよ」

黒月「着信音にさせてもらおう」

プルツー「ひぐっ……や、やめて……っ……ぐださい……」

黒月・プル「（うぐっ……すごく胸が痛い！！）」

ガタガタガタ……

黒月「やばい事になってそうだ、とりあえず様子見だな」

プルツー「ひぐっ……ヒグッ……」グズグズ

プル「泣かないの泣かないの！早く机の下から出てきて！」

ドタドタドタ…バァン…！

シーーーーーン

戦闘員A「この講義室には誰がいることになってる？」

戦闘員B「俺の嫁のプル姉妹とさく…もとい、一般人だ」

戦闘員A「じゃあマリダさんはもらって行きますねww…どこにもいないぞ？隠れたか？」

戦闘員B「まあいいんじゃない？2、3人以内程度で何もできないだろっしな」

黒月「……………行っただか」

プル「あいつら後でやる」

プルツー「……」ムグムグ／／／

小生たちは掃除用具入れの中に潜んでいた。広い講義室なので用具入れは二つある。そのうち一つに泣きじゃくるプルツーの口を抑えた小生が入り、一つにプルが隠れたのだ。

プル「ほんとにどうする？面倒なことになってるよね……」

黒月「ガキ二人に素人一人ではどうしようもないだろう。通風孔がなんか使って脱出口を探しに行くのが得策だ」

プルツー「グシグシ……よし、ここから近いのはコーヒー屋さんだ、私が案内する」

黒月「そうか、ガトーさんなら……って何で知ってた？」

プルツー「できるだけ人に出会わないように通風孔使ってた」

黒月「……………」ジトーーーー

プルツー「さ、最近は違うぞ?!ちゃんと廊下で移動してるからな  
!」

プル「私の後ろか物陰に隠れながらだけど」

黒月「……………」ともかく。やつらは事前にこちらの様子を知っていた  
ようだ。とりあえず小生たちはマジでやばい。プルツー、案内頼  
むぞ」

プルツー「わかった、ついて来い」ガチャガチャ…ガコン

プル「フタの取り方が手馴れすぎだよ…」

## スニークンゲミッション其の巻（前書き）

短編集ゆえに話数が伸びる伸びる…

これが終わったらラグナロクを書き直す予定です

## スニークミッション其の壱

ブルツーが先頭で意外と広い通風孔の中をハイハイ状態で進む。通風孔つつーからもつと歩腹前進しなきゃいけないかと思っただが、そうでもなかったので安心した。外に会話が漏れると危ないので会話は基本的に小声である

黒月「後どれくらいだ？」

ブルツー「もう少しいったところに…あ、あつた」

進行方向に光が入ってきているところがある。まだあの戦闘員っぱいのがいるかもしれないので特に注意しながら進もうと目を凝らした瞬間

ガトー「あ」

3人「あ」

ばったり。流石はす…ガトーさん。考えることが傭兵っぽい



ガトー「君たち、無事だったか：いやよかった」

黒月「その節はお世話になりました。ガトーさんのところにも奴らは？」

ガトー「下手に騒いで目立つのも危険だからな。停電の直後休業中の看板を出してからここに逃げ延びたんだ」

プルツ「間抜けな戦闘員だったな」

黒月「どうする？このMS乗っ取られて使われたら大変なことになりますよ？ただでさえワンオフの高性能な機体が集まってんのに」

ガトー「大丈夫だ、このMSは専用のキーがないと動かせない。キー無しだと内部のOSを大幅に書き換えなければならぬからな」

プル「イノベイダーの皆でも解析に1ヶ月はかかるって言われてるしね」

黒月「（そっぴや通いだしてもう32話：もとい、3ヶ月ほどか。今日はヤモリは来ないって言ってたな：激運でもついてんのかあいつ）」

そのころヤモリは

ヤモリ「ぎゃらくしいいいい！！！！」ドガガガガガ…

ピシッ

ヤモリ「あ、すみません、アウトです！ちょっ…アウトだって…いてっ…まじシヤレにならな…いてててて！！！」ピシピシピシピシ

ヤモリ作・さばげーって何ですか？ 絶賛不定期更新中！

ガトー「ともかく脱出だ。ついて来い」

小生たち3人はガトーさんについて外へと脱出を試みた。何が起こ  
つてゐるって言うんだ？

教習所から少し離れたところにある児童公園。公園のベンチで一人  
刹那はコーヒーを飲みながらたそがれていた

刹那「今日は昼からあの子が来るといつてたから待機してる。あと  
休日出勤だ。特別手当を要求しとかなきゃあいつを養うことはでき  
ないからな」

と、目の前のマンホールが揺れたような気がした。気のせいだ

ガトー「リイ　ツドオオーーーー！！！！」ドカーン！！

刹那「うおおおおおおお？！？！？！」

マンホールからガトーさんが飛び出てきました。

でじゃヴー！

刹那「んで、何でおっさんがここに出てきたんだ？」

刹那の頭には大きめのたんこぶ。ガトーさんが吹っ飛ばした蓋が直撃しました

刹那「メタル化してなかったら死んでたぞ俺？どおしてくれるんですかあ？」ビキビキ

黒月「ネタバレしてます自重してください。事情は説明します、まずは聞いてください。ガトーさんを殺すのはその後です」

ガトー「ヲイ…チョイ待てやこのやろっ」

カクカクシカジカ

刹那「カクカクウマウマ・カクカクウシウシ…か…只事ではないな、俺も行こう。少しは力になれるだろう」

黒月「少しどころじゃありませんよね…」

ブルツ「さっき施設に通信を試みたが、施設に入る電波全部シャットアウトされてる。いよいよ只事じゃない、籠城されるだけで凄まじい経済的打撃が発生するぞ」

ブル「それなんて電人…」

黒月「シャラップ、レディース。でもむやみに突撃して犠牲は増やしたくはない。様子見するのがいいんじゃないか？」

ガトー「賢明な判断だ。テロリストは何かの思念に沿って行動している、それがはっきりするまで下手に手は打てない。本気のやつらなら自爆することさえためらいがないからな」

刹那「さすがは鬼畜テロリストと伝説の傭兵の二束のわらじ」

ブルツ「それ考えるとすごいよな、この人…」

そのころ

隠れられなかった教習所の生徒と講師たちは無駄に広いエントランスに両手両足縛られて放置されました

アムロ「俺たち登場するたび何かしらひどい目にあってないか？」

シャア「若さだ…」

アムロ「何がだよ」

戦闘員A「おらそこ！喋んじゃねえ！一週間代えてない靴下攻撃！  
！」むおお~~~~ん

アムロ・シャア「ぐわああああ？?!」「」

戦闘員B「おい、そろそろボスの宣戦布告の時間だぜ」

戦闘員C「おう、テレビつけっか」ガシャコッ

アムロ「（いまさらVHD…つかビデオレコーダーが置いてあるのもアレだけどさ…）」

少しの間砂嵐が流れた後、テレビにいすに座った誰かが映し出された。

？『ふはははははー！！…ブはっ？！ゴホッゴホっ！！ヴえっほえっほー！！』げほげほ

一同「……………（むせおった…）」

？『ゴホン！ゲホッ…私の名はディアス・プロヴェンツ！オリキヤラだ！』

一同「いきなりメタ発言しやがったこいつー！！！！」ガビン

ディアス『そしてこの教習所を占拠をしている組織、テクノレイクのボスだ』

人質一同「（自由のみになったらこいつ絶対殺す）」

戦闘員一同「（なーんで俺たちこんなやつ部下なんだろう…orz）

」

ディアス「今お前ら失礼なこと思ったよな！？ちなみにこの映像は教習所の施設を利用してリアルタイムで全世界に放送されている。私の目的をお教えしよう。私の目的は…」

？「この地球に宇宙要塞・アルテミスを落として地球破壊すること」

ディアス「私のセリフウウウ！！！」

自分の目が信じられなかった。変態の隣にいるのは数日前まで一緒にMS教習を受けていたへんた…もとい、レイナだったから。ちなみに小生たちは電気屋の前に置いてあるテレビでこの映像を見ている

レイナ「やつほ〜黒月、ヤモリ師匠、みてる〜？」

黒月「何であいつがあんなとにいるんだよって真実はいつもひと



つか…」

レイナ『そう！真実はいつも2〜300個！！』

黒月「多！！」

レイナ『まあ冗談はさておき、私残念ながらこいつの娘なの。今まで教習所に通ってたのはもっとも危険な施設を偵察、侵攻しやすいようにセキュリティーとか書き換えたりしてたからなんだよねww  
あと一週間で死んでもらうことになるから残りの余生を楽しんでね  
ってことなのwwというわけでバイナラ〜』

ディアス『ち、ちょっと待て！訳も説明してないし私ほとんどしゃべってな…』

ブチッ

一同「終わった…」

戦闘員A「ははははは！！お前らも俺もおしまいだ！って駄目じゃん！！」ガビーン

戦闘員B「気づいてなかったのかよ？！ちなみになんで地球滅ぼそうかと思ったのかっていうと前の戦争で自分だけワンオフの機体してもらえなかったからっていう理由だ」

一同「なんてとばっちり！！」

戦闘員B「俺たち戦闘員は生きる意味を失ってたところをあの変態に拾われたんだ…たえ変体でも一応は恩人なんでな…死ぬ覚悟も、一応はあるさ」

アムロ「一戦闘員にしちゃずいぶんとかっこいい…俺よりおいしい役柄じゃん…」orz

シャア「何の脈絡もなく裸になったりする私よりはましだろ」

アムロ「あれはあれでおいしいじゃないか…」

シャア「私は芸人ではない！！」バリーン！！

アムロ「また脱げた!!??」

崩壊の期限<sup>リミット</sup>まで、あと一週間…ピッ  
ドコン  
ピッ  
ドコン  
ピッ

やるっきゃないでしょやっぱ。

刹那「正直クアンタがトランザムして突貫すれば何とかかなと思うんだが」

ガトー「その場合みんなお陀仏するがな」

TV『緊急ニュースです。MS教習所のMSが起動したとの情報が入ってきました。先ほどガンダム試作2号機が格納庫から姿を現したのを当番組が目撃しました。それがこちらの映像です』

ガトー「私のガンダー……ーム……！」

黒月「ナムサン……ついにMSまで乗っ取られたか」

ブル「私たちのキュベレイも乗っ取られちゃってるかな……」

ブルツィ「あの変態、並大抵のハッキング能力じゃないな……おそろくデザインベイビーだろう。何か似通った気配を感じた」

黒月「あんの糞野郎……娘を改造してまで地球をつぶすつもりか?!」

ガトー「落ち着きたまえ。まずはどうするかだ。人質がいる以上下手に武力介入すれば施設ごと崩壊してしまうだろう。重すぎる犠牲だ」

刹那「ということは教習所にいるメンバーの救助が最優先ということか。俺とガトーさん、それに今日休みだった講師その他で救助していく。お前たちはここで待っていてくれ」

黒月「待つしかできないってのか…クソツタレが!!!」

プルツー「落ち着け黒月。私たちはできることをすればいいんだ。帰ってエロゲするとか帰ってエロゲするとか帰ってゴロゴロするとか」

プル「教習所の外側で敵の注意をひきつけなければいいんじゃない？そうすれば防御も手薄になるだろうし。私たちの家にある量産型キュベレイで何とかできるかも」

ガトー「陽動作戦か。それなら私たちも動きやすくなるだろうが…」

プルツー「スルーですかそうですか」

刹那「量産型か……量産機は数で押すように作られてるから防御面では少しこころもとないな」

黒月「そういえば……ちょっと待ってて」prrrrr

ヤモリ「おう黒月か。今俺は 者タイムなんで後にしてくれ」

黒月「おい……ぶっ殺すぞ……まあいい、話を続けるぞ。ニユースは見たな？」

ヤモリ「おう。今日お前あそこに行ってたんじゃないのか？」

黒月「運よく逃げ切れたんだ。お前昨日専用MS完成したって言う

てたよな。今日がその出番だ」

電話の向こうでヤモリがにやりといやらしい笑いを浮かべたような気がした

ヤモリ「詳しく聞こうか。黒月」

教習所の周りをぐるりと囲むように量産型のMS。その中にはちらほら強力なワンオフの機体が混ざっている。今、MS教習所は難攻不落の要塞へと姿を変えた。

戦闘員A「だ〜れが好き好んでこんな物騒なところに近づくもんなねえ…表にいたTVスタッフも退去しちまったし」

戦闘員B「お前が間違っただろ！力ぶつ放したからだろうが。それでも、1週間後にはみな死んでしまうんだ。悪あがきでもしよう」と

思うものが一人二人いてもおかしくはない。どうせ俺たちは散る運<sup>だめ</sup>命のやつらばかりなんだから」

戦闘員A「いいよなあお前は。俺なんかドライセンだったのに、何でお前はサザビーなんだよ」

戦闘員B「お前はオールタイプだろうが。能力は低いが俺はニュータイプだからだよ。…ニュータイプだからってあんまい気はしないんだよなあ…時々倒した相手の断末魔が頭の中に響いてくるんだ」

戦闘員全員がつけているガスマスクのせいで表情は読み取れないが、その声からやるせない雰囲気伝わってくる。

戦闘員A「それでも、だよ。人間ってのは自分に無いもんを欲しがる。無いものねだりって言葉があるくらいだからな」

ヒュン



戦闘員A B「ん？」

一瞬何かが通り抜けたような音がした。一陣の風か、それとも…次の瞬間戦闘員Aが乗っていたライセンがバラバラに分解されてしまった。大きな音を立ててドライセンのパーツが地面に落ちていく。破壊ではなく、分解された。パーツ自体に傷はまったく無く、つなぎ目が外れた感じた。どう考えても普通の兵器ではない

戦闘員A「ぎゃああああ？！」

戦闘員B「おい！大丈夫か？！誰だ！！」

？「Electric Long Overキャノン（超長距離電磁砲）……略してEROキャノン！俺の砲塔息子は今日も絶好調だ…そしてこの弾丸……MS装甲のマグネット金属分子結合を弛緩させバラバラに分解してしまう特殊電磁砲弾KBB弾（金属をバラバラにする弾）……パーフェクトだ！！」

戦闘員B「上手い下手の問題じゃないけどスッゲー腹が立つ！！誰だ貴様あー！！」

？「あえて言わせてもらつとすれば…私は変態という名の紳士であり紳士という名の変態…その名はッ…！」

戦闘員B「行け！ファンネル…！」

6機の小型無線ビットサイコミュ兵器、ファンネルが謎の機影に向かって飛んでいく。あえて言おう、不意打ちであると

？「え？ちょ…おま…名乗るくらいさせ…うわあぶなっ…！しつこ…うお？！…くそっ…！」

間抜けすぎる避け方、だが紙一重でビームを避けていく謎の機体。

戦闘員B「動きは鈍い…！行け！ファンネル！やつをバラバラに打ち崩せ…！」

戦闘員Bの脳波に導かれたファンネルが再び謎の機影へとオールレンジ攻撃を食らわせる。あらゆる方向から謎の機影へと向かってビームが発射され、謎の機影に向かって直撃しようとした瞬間…

？2「ソードビット、集結！」

6つのソードビットが3機ずつに収束し、謎の機影をビームの嵐から守った。

戦闘員A「何?!」

?2「やれやれ、もうソードビットじゃなくてシールドビットに付け替えてもらおうかな…」

謎の機体2体目。こちらはなんだかごてごてしており、いかにもゲテモノくさい。例えていうならアビスガンダムのバインダーを平たくした感じのやつが両肩についており、顔面はブレイヴやフラッグのような感じだ。

黒月「さあゝて…小便は済ませたか?カミサマにお祈りは?鉄屑の上で土下座して小生たちに命乞いする心の準備はオーケー?ガンダムアルドラ、黒月推参!これよりMS教習所奪還およびアルテミス落下阻止作戦に参加する!」

ブルツ「同乗者ブルツ、同意する。思い切りやってやれ!」

ヤモリ「諸君!私は戦争は好きだ。だが!これは戦争ではない!よって、これより貴様らに本物の戦争というやつを教えてやる。F・

ヴェンザ！ヤモリ推参！」

プル「同乗者エルピー・プル、同意する。…チョコパフェ食べたいな〜」

最後は確実に何かが違うというのはツツ込まないでほしい

戦闘員B「くっ…待機戦闘員！AとC部隊は教習所東門へ集結！コンディションレッド発令！各員、戦闘体制をとれ！」

教習所のガレージから次々量産機やワンオフの機体が出現する。その数多数。

ヤモリ「やれやれ、キズ・ヘコミ程度じゃ済まされなさそうだ」

黒月「んなもん、教習所かユーラシア連邦に払わせときゃいいんだよ」

ヤモリ「黒月マジ天才www…じゃあ、征くぜ！…リロード…！」

EROキャノンに第2射目のKBB弾が装填された。

ヤモリ「まとめてぶっ散らばしてくれるわぁ！！」

真面目にやろうとした結果がこれだよ

「イきなあ、フアングウ！！」

戦闘員Dが駆るアルケーガンダムの腰部の武装ラックから6機のGNフアングが飛び出る。

「フアンネルとフアング、どっちが強いかなんざわかんねえけどやつてやらあ！！」

黒月の乗るガンダムアルドラの肩部バインダーからフアンネルが射出され、フアングを迎え撃つ。壮絶なオールレンジ攻撃の嵐である。フアングのビームサーベルがフアンネルを切り伏せたと同時に他のフアンネルに狙い打たれ、爆発。その繰り返しである

「おおおおおおらあああああああ！！」

オールレンジ攻撃だけでは決着がつきそうにないので、アルケーガンダムがGNバスターソードを構える。ガンダムアルドラがビームサーベルを抜刀し、お互いに全力ブーストで突撃する。空中に大きな衝撃が走り、周りの大気が一瞬震える。

ズガアアアアアン！！！！

「甘いんだよお!!」

アルケーガンダムつま先に仕込まれた隠し腕がアルドラの足を切り落とそうと迫る。

「どっちが甘いかもう一度確認してもらおうか!!」

アルドラの膝部の突起が伸び、隠し腕として機能。仕込まれているビームサーベルを抜刀し、アルケーの斬撃を止める。そして攻撃を受け流し、そのまま足首から下を切り落とす。そして反対側の足でアルケーの腹部を思い切り蹴り飛ばす。

「うおおおおお?!」

アルケーガンダムは元々アリー・アル・サーシェス専用機として開発されたものだ。この機体の高性能さは彼の圧倒的バトルセンスを持つてはじめて遺憾なく発揮されるようなもので、いくら戦闘教育を受けた戦闘員といえどその性能を生かしきることはかなり難しい。

「くそつたれg…」

「遅いよ」

アルケーの関節部分にファンネルがビームを打ち込み、手足の機能を停止させる。そのままアルケーガンダムは緩やかに大地へと墮ちていった。ちなみにビームやミサイルなど殺人的な意味で物騒なものが飛び交っているが、この世界のMSの武装にはすべて致死防止加工が施してあり、どれだけ撃つても殴つてもせいぜい半殺し程度にしかならないのである。そこのところ注意してほしい。よい子は真似しちゃいけません

実は言うところまでアルドラのファンネルを操っていたのはプルツィである。そして彼らがなぜ免許もないのにMS乗ってたっていうと仮免許を持っているものは付き添いの講師の人が同乗していればMSに乗ることが可能なのである。

「黒月にはやはり私がついていないといけないな。ファンネルの扱いがなつてなさすぎる。まったく、なんでファンネル搭載機の免許なんて取ろうと思ったんだか」

「ちくせうちくせうちくせうー！オールレンジ攻撃とかロマン以外の何もんでもないじゃねえかー！」



暴走して手当たり次第に量産期を攻撃する黒月。プルツーにしてみればそれとなくそんな感じを匂わせたかったのに、この主人公はどいつもメンタルが非常に脆いのが祟った。そのせいでファンネルの動きが不安定なのではないだろうか

「全員まとめて奈落へ墜ちろー！ー！」

ヤモリの搭乗するF・ヴェンザの肩部のミサイルポッド「マンモス」から大量のミサイルが射出され、ターゲットを撃墜しようと迫る。

「舐めんじゃねえー！ー！ー！ー！」

ガンダムヘビーアームズに搭乗した戦闘員Eがこれでもかというくらい弾丸をバラ撒く。下手な鉄砲数打ちやあたるの理論である。ミサイルの弱点は密集して撃つと誘爆で次々に撃墜されやすいという点だ。ヤモリの放ったミサイルもまた叱り。次々爆発して破片があたりにはばらと落ちてきた。すさまじい爆風の中からもなが動いているのを戦闘員Eは見た。

「…… K B B 弾装填完了、 ロックオン！ー！ 3 0 0 m m 対戦艦用砲発

イッマデタツデモ、ハルコネン

射準備よし！！発射アアアア！！！！」

紅蓮の爆風の中からすさまじい轟音とともに弾丸が射出された。MSを一撃でばらばらにする恐ろしい弾丸だが、弾丸から発せられる微弱な電磁波は使っているMSにも影響するのでその分取り回しに難があるのが弱点である。

「ぎゃあああああああ！！！！？」

「よっしゃア！次い！来やがれえ！」

「……陽動とはいえちょっとやりすぎではないか？」

「同感だ……」

排気ダクトから進入したガトー、刹那は情報収集のため、教官室を目指す。装備は最低限の武装があるが、ガチで武装した戦闘員たち

にはあつてないようなものである。

「サブレッサー消音装置付の麻醉銃だけではやはり無理があつたんじゃないか？」

「大丈夫だ、問題ない。さあ、早くほかの講師たちを救出しに行こう。そうすれば突破口が見出せる」

歩伏前進でダクトを進む二人。早いとこ脱出しないと外の4人のせいでエライ事になるかもしれないからだ。

もはや最初の原型がない件について（前書き）

お久しぶり！黒月だよ！！

ごめんね、遅れすぎたよね……

もはや最初の原型がない件について

ドカーーーン!!

ガトー・刹那「なんじゃいなんじゃい?!?!」

今度は外からではなく建物内からの爆発らしい。本当に何が起こってるって言うんだ?

ダクトの下から怒鳴り声が聞こえてきた。こちらでも戦闘中?

「くそっ!! MS題材にしてるんだから非科学的なこととはなしだろ!!」

「ちい!! 練成陣無しだ?!」

.....

ガトー・刹那「…………やるか」

ガタン

ヒュパッ

ドカツ!!

戦闘員「え

はん!!」

排気ダクトを蹴破り、天井からいきなり登場、戦闘員たちはびっくりする暇もなく意識を手放すこととなった。

刹那「脱出できたのか、お前たちも」

ロラン「ええ、なんとか。他の人は解りませんが……」

ミーナ「偶然折れたチョークが床に落ちてて、バレないようにそれ使って地面にれんせ……」

ガトー「皆まで言っな」

黒月「あの二人大丈夫かな。さっき調子乗って教習所の一部ぶっ壊しちゃったけど」

プルツー「それより今は自分のことを心配したほうがいいんじゃないか?！」

シールドビットをあらゆる方向に展開し、敵からのビーム攻撃を防ぎながらプルツーは叫んだ。かく言う黒月も隠し腕を駆使しながら相手のMSのビームサーベルなどの近接武器の斬撃を受け流し、反撃し続けている。四面楚歌、つまりは劣勢なのである。

プルツー「プルは大丈夫だろうか……気配はするから生きてはいるだろうが……」

黒月「ヤモリも簡単にはくたばりはしないだろうが、このままじゃギリ貧か……つくづく太陽炉とか反則だ」

ビー……!!……ビー……!!……

ジャンク品を流用して作られたセンサーが急速に迫る機体感知、鋭い警告音を鳴らす。その方向へメインカメラを向ける。そこには見たこともないようなMSが居た



？「やつほー、ムスコさんは元気してる？黒月クン」

ブル・ヤモリ「いったゝゝい！！もう何すんのよ！！」

一瞬の静寂。

ブル「おえつぶ」

ヤモリ「ごめん、俺も自分で言つてて吐き気がしてきた」

弾薬はもう既に残りわずか、必殺弾のKBB弾はすでに尽きている。それほど動かず砲撃に徹していたおかげか、エネルギーはまだまだ残っている。ヤモリは諸刃の剣を使うことを決めた

ヤモリ「プルちゃん、乗り物酔いには強い方？」

プル「一応MS乗りだよ私？大丈夫大丈夫！！」

ヤモリ「そうか、だが一応エチケット袋を渡しておく。覚悟しなよ」

プル「？ わかった」

四方八方からギラ・ズールが武器を構えながらブースト全開で突進してくる。攻撃が直撃しようとした瞬間、ヤモリは覚悟を決めた

ヤモリ「キャスト・オフ！！ F・ヴェンザ、迫撃を開始する！！」

もはや最初の原型がない件について（後書き）

終わりが見えなくなってきました。どーしましょ

そろそろ本気出すって言ってる時点でout

コックピットの計器の画面に「キャスト・オフ」という言葉が表示される。その隣のタッチ画面の手形認証にヤモリは手を当て、ロックを解除する。この力を使うときがきたのだ

ヤモリ「今見せよう、このF・ヴェンザの真の姿を！！」

一瞬パーツの間が光ったかと思うと、全身のアーマーの一部が凄まじい勢いでパージされる。その破片がギラ・ズールを一掃する。だが致命傷とはいかない、少しダメージを負った程度だ。次の瞬間、舞い上がる土煙を切り裂いて、濃紺のマントを翻し、純白の白騎士が戦場に現れた

ヤモリ「今までこの姿を見て生き残ったものはいない！光栄に思うがいい！この姿を見ただけでも貴様らはたいしたものだ」

ブル「今日始めて動かしただけじゃん」

ヤモリ「ではヤモリ！！イツきまーす！！」

ブル「聞いてないのね」

腰部に備え付けられていたG・ビームアックスジャイアントを抜刀、敵MSを駆逐する。驚くべきはその速さだ、重いアーマーを外すだけでここまですぐで違うものなのか。戦闘員たちはただただ驚くしかなかった

ヤモリ「（スピードは普通のMSでは捕らえきれないだろう。その代わり装甲の強度は紙レベルにまで落ちてしまっている。スピードのGにはかろうじて耐えられているが、パンチ一発でも食らったら即お陀仏だろうな……そして過剰なブーストダッシュによる燃料の大量消費……諸刃の剣とはこのことか）」

今日昼に食べたカップラーメンが胃の中で激しいブレイクダンスを踊っている。逆流しそうなメンマとチャーシューをぐっと押さえ込みながらヤモリは戦う。

毎日ポテチ食って、飯食って、ポテチ食って、エロ動画見て、ポテチ食って、エロ本見て、寝て、の繰り返し。家族からはブタと言わ

れてきた。それを払拭するために彼は戦う。そして俺はブタではないことを証明するのだ。

ヤモリ「俺は！！俺は断じて！！ブタではなあああーい！！

チャーシューだあああ！！」

操縦桿を思い切り前に倒し、制限速度ぎりぎりまで加速する。進行方向上にいたドライセンは純白の閃光が目の前まで来ているのをモノアイで捉えたのを最後に撃墜された。

黒月「おまえがここにすることは想定外だったな、レイナ」

レイナ「録画してたからね、あの映像。あ、見て見て！これ私専用MSなんだ」ガンダムナイトメアって言うんだよ！」

漆黒の機体。一言で表すならそうだ。後ろについた竹の子から撒き散らかされている黒い粒子っぽいものからして太陽炉塔載モデル、後ろにはかめめ波をするときの手を横にしたような形をしたバックパックがついている。全身刺々しい感じだ

黒月「ずいぶんとまあ厨2臭い機体だな。小生の好みど真ん中だ」

レイナ「ヤダ大胆なんだから／＼／＼」

黒月・プルツ「「おまえじゃねえよ」」

レイナ「仲がよろしいのね、妬けちゃうわ。ぶっ殺してあげる。黒月は私のものなんだから!!」

黒月「キャラが345度変わった……ヤンデレだったのかよ、こええ」

プルツ「この状況でよくボケられるな」

背中 of 棘の先が分離、遠隔操作武器として動き始めた。太陽炉塔載モデルなのだからおそらくファングだろう。プルツに任せるしかない。

黒月「頼みます、プルツ先生!」

プルツ「し、仕方ないからやってやる!!勘違いするんじゃないぞ!!これはry」

黒月「あ、ファンネル一個落とされたぞ」



ブルツ―」

？「久しぶりにお呼びがかかったと思ったら面白いことに首突っ込んでるな、黒月たち」

？2「ああ。まあいいんじゃないか？奴ららしい」

？「んじゃ、調整も終わったし……」

？・？2「助けに行きますか！！」

そろそろ本気出すって言ってる時点でout（後書き）

短いですね、はい。百話まで行きそうで怖い

## 意外な決着

なぜ私はこんなことをしているの？なぜ？どうして？わからない、わからない。初めてできた友達。何で戦わなきゃいけないの？なんで……口から思ってもいないことが次々と吐き出される。やめてやめてやめて！！

深い意識の海に沈みこんでいくレイナの意思。彼女が再び自我を取り戻すことなど、あるのだろうか

「レイナの脳量子派が乱れています」

「沈静電波をコクピットに流せ。戦いに会話など必要ない。ついでに感情をオフにしてしまえ。これなら戦いやすいだろう」

巨大なモニターの前、フカフカの大きな椅子に座る男。地球滅亡を目論む男その人。ディアス・プロヴェンツは自分の娘が戦っているのを静かに観賞していた。不意にニヤリと笑う。部下は尋ねた。

「自分の娘を戦わせて面白いのですか？」

「あれは私の実の娘ではない。置き去りの子供を使って作られた改造人間だ。自我が芽生えたのは想定外だった。あの青年たちと出会ってからだ。記憶操作で何とかなれると思っていたが、やれ、こうしなければ感情を制御できないとはな」

「（つくづく下種な人間だ）」

レイナ「ほかのもの、こいつは私が殺すわ。あなたたちは待機してなさい」

その他戦闘員「はっ！！」

ほかのMSが次々戦線離脱していく。たった今2機のMSは互いのファンネルとファンングを全滅させたところだ。プルツーには感謝しなければならぬ。小生一人だと確実に捌り殺しにされていただろう。相手のファンング8機に対してガンダムアルドラのファンネルは6機、戦闘前のボケで一機、それ以前のアルケーガンダムとの戦闘で2機撃墜されていたので実質3機のファンネルで8機のファンングを撃墜したのだ。小生がやったら瞬殺だったろうな。こっちが

黒月「最後はやっぱ近接だよな。〇〇最終回みたいだ」

レイナ「あら、ラストシューティングと呼ばれる最終決戦を蔑ろにする発言をしないでくれる？」

ブルツ「うう…持病の頭痛が…」

黒月「もう休んでいいよ、ブルツ」。年寄りっぽいこと言わないの。ちよつと揺れるかもしれないけど、ちよつとの間我慢してくれ」

レイナ「お喋りはこれくらい。始めましょっか」

まるでお茶会でも始めようかとしているような軽い言い方。仕方ない、格ゲーで鍛えた腕を見せてやる！！小生はハンドルをコントローラーに持ち代える。

黒月「いざ…！」

レイナ「尋常に!!」

「勝負!!」

ティエリア「セラフィムガンダム!!トリアルフィールド!!全員まとめてシャットダウン!!」

二人「ええ〜」

その場にいたMSすべてが強制的にシャットダウンされた。ティエリアさんマジ外道

さすがに一般人にどうかかできるレベルじゃない(前書き)

結局行き詰まりました。なので強引です。グダグダ続けるよりサパ  
ツッと終わらせたいほうが良いかと思……早い話が、ごめんなさい

さすがに一般人にどうにかかできるレベルじゃない

ガトー「間に合ったか」

刹那「プル先生方も、二人を止めるべきだった。なぜ仮免許しかもっていない二人を巻き込んだ？」

プル「物語が進まないから」

プルツー「メタい発言は控えよう姉さん……」

レイナ「……………」

黒月「レイナ？」

ヤモリ「さっきからずっとこんな感じだ。まるでスイッチが切れちゃったみたいに動かない……………」

黒月「ディアスの野郎が何かレイナに施したんだろう。早くあいつをぶんじばってレイナを助けないと…………つかアルテミス落ちてきて



んじゃん！…どうすんの収集つかねよ！…」

刹那「少し落ち着け。もうどうしようもない。残された時間、マリナとすごしてくる」

ティエリア「ちなみに量子ワープは使えないぞ」

刹那「……………！！……………逃げるつもりなどない」

ティエリア「嘘だッ！！まあそれはおいといて、どうしたものか……」

少女「お兄ちゃんたち」

黒月「いつぞやの………具体例を挙げればタイトル『僕らのry』に登場していた心優しい少女ではないか。久しぶりだね、こんにちは」

少女「こんにちは！…ユリとランの調子はどう？」

黒月「すごい元気だぞ。もはや教習所のマスコットだな」

少女母「娘がお世話になっております」

刹那「これも仕事だ。構わない」

p r r r r r r r r r r r

少女母「あら、誰かしら……ああ、あなた！今どこ？！……ええ  
っ？！」

黒月「何かあったのかな」

ヤモリ「いやな予感がしないでもないな」

少女母「……わかったわ、絶対に帰ってくるのよ……」

P i

刹那「何かあったのか？」

少女母「夫が……ディアスに奇襲をかけたようです」

一同「な、なんだってー！ー？！」

少女母「傘の動力を破壊できたらしいです……地球の重力権に入る前に対処できてよかった」

ティエリア「最悪、レクイエムやコロニーレーザーでアルテミスを破壊すればいいのだろうが……ディアスはどうなったと？」

少女母「ディアスは行方不明だそうです」

ガトー「当面の目的はアルテミス内部に取り残された人たちの救助だな」

ヤモリ「お前が何とかすべきだったんじゃないか？」

黒月「物語の主人公が何でもすると思った尻は大間違いだ！！」

一同「コラアアアーーーー！！」

さすがに一般人にどうかかできるレベルじゃない（後書き）

正直どうにかできませんでした。アルテミス落下だけは。だがしかし！！次からは今度こそ真面目に不真面目一直線だコラア！！

120%他力本願時寺、そしてエンディング（前書き）

終わり！！

ぐだぐだ続けてもいいことなんかひとつもないぜ！ww

正直悪ふざけが過ぎたのは自覚してます。全てのガンダム大好きさんへ、すみませんでした

## 120%他力本願時寺、そしてエンディング

黒月「まあこれで一応やるべきことは全部終わったのか。グダグダだったけど、こうして終わりに近づくと感慨深いものがあるな」

ヤモリ「おい、まだ終わってないから。まだエピローグには早いかな?」

黒月「わかってる、ディアス見つけ出してレイナ直す方法聞きださなきゃ」

ディアス「その必要はない」

先ほど停止したはずのガンダムナイトメアのメインカメラが怪しく光る。

悪夢が、再起動した

ディアス「ふう、さすがにトランクの中に隠れるのは息が詰まったぞ」

黒月「トランクに隠れてやがったのか?!」

ディアス「それはそうと、その前髪だけ局地的な天パー。私とガンドムファイトっぽいことで勝負しろ」

黒月「よしぶっ殺す細胞ひとかけらも残してやるものか」

ヤモリ「アルドラの燃料大丈夫なのか?」

黒月「oh!!.....作戦タイム!」

ディアス「認める」



ブルツ「教習所の動けるMSはどれぐらい残っている？」

アストナー「ほとんど動けないぞ。あいつらがMSのOSを既存のものと正反対にプログラムを書き換えたようだ………さてよ？たしか倉庫の奥のほうに整備しようとエンジン取り外したクシャトリヤがほったらかしになっていたはず……太陽炉の予備があれば何とか同調させることができるかもしれない……」

黒月「ご都合主義バースト全開だなおい」

アストナー「あつたあつた！ 狐の商人から買った安いけど粗悪品の太陽炉！ 数年前の太陽炉爆発事故起こした太陽炉と同じモデル！」

黒月「おいましてふざけんな」

ヤモリ「世界の命運は任せたぞ、黒月。時を超えその名前を覚えておくから」

黒月「なんで紅く燃え見事に散ること前提なのつかマジでシャレに  
なんないからおかしいってボク死んじやう！ 相手は変態だけど軍  
人！ 小生一般人！ 主人公パワーゼロだから小生！」

話は飛ぶが、なんていうか、その後の話だ。

あのあと小生とディアスは戦おうとしたわけなんだけど、その前に世界中の連合がディアスの所在を突き止めて一瞬のうちにディアスを捕縛。最後にものを言うのはやっぱり権力でしだって話だ。

んで、レイナのことだが、目の前にご飯置いたら再起動しました。ただの空腹だったようです

んで、いつだったか、最後のほうで思わせぶりな登場をしようとした小生の友人二人ですが、こっちに支援に来るのではなく、アニイトに行くのにストライクフリーダムとガンダムハルトで行こうとしたところを親兄弟に全力で止められ、登場には至りませんでした。

とまあここまでが小生がこの教習所に通っていた話だ。

黒月「ふあゝあ……さすがに電車の始発はきついぜ」

免許試験場まではかなり遠い。間に合うためには始発の電車で試験場へ行き、予習などしておくのがよいと、おかんから教えてもらった。でもやっぱり眠い

自宅の最寄り駅から4つくらいの駅で小生は知り合いを見つけた。

黒月「ようレイナ。お前も免許取りに行くのか？」

レイナ「おっふあよ、くろふきふん……そうだよ」

黒月「欠伸しながら喋るんじゃない。おはよう」

レイナ「旅は道連れ世は情け、試験場まで一緒に行こ？」

黒月「おう……（黙ってりゃかわいい女の子何だけどなあ……）」

レイナ「え？　ち、ちょっと待って、後半思考が駄々漏れだよ?!」

黒月「おっと……だがしかしそれ、事実」

レイナ「くせあ k s l d h n t f g b l s ふじこ」

からかいがあるな。混雑していなければ免許発行は早いと聞いた。合格していればの話だが。そのとき時間が取れれば……いや、そのとき時間がとれずとも日を改めてでもこいつに言おう。いろいろ、言いたいことが山積みだ

小生は予習のため、鞆に入れておいた教習所の教科書を開いた

120%他力本願時寺、そしてエンディング（後書き）

終わりです。いやあ、無駄に短くて話数稼ぎでくっだらな小説でしたねwww

まあ一本の小説を完結させる難しさを身をもって知れたのは貴重な経験だと思います

最後はいい話っぽく終わらせました。やつつけですけどwwでは、次のパレルムーンシリーズをお楽しみに

では最後に!!!じゃん!けん!

石破!!!てえええんきよおおうけええええんん!!!!!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1462s/>

---

ガンダム免許教習所！！

2011年12月17日21時46分発行